



Title	言語文化の比較と交流（12）（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102212
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト2024

言語文化の比較と交流12

佐 高 春 音
中 直 一
中 村 綾 乃

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻

2025

ま　え　が　き

本共同研究プロジェクトは、大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻に所属する教員と、同専攻博士後期課程に在籍する大学院生をメンバーとして 2013 年度に発足した。12 年目となる 2024 年度は、昨年度のメンバーに新たに鈴木大介氏が加わり、教員 8 名と大学院生 1 名で研究を行った結果、3 名の論文が掲載に至った。

「言語文化の比較と交流」という名称が示すように、本プロジェクトは、専門分野を異にする研究者が大きな枠組みの中で緩やかに繋がり、それぞれのテーマを追求しつつも、各自の研究の底流をなす「比較と交流」という視点から、言語文化学に寄与することを目的としている。本書は、その共同研究の成果を集成したものである。

2022 年 4 月、大阪大学は言語文化研究科と文学研究科を統合し、人文学研究科を新設した。これに伴い、言語文化専攻も人文学研究科言語文化学専攻として生まれ変わった。本書は新体制 3 年目に実施された共同研究の成果を集成したものである。

本共同研究プロジェクトが、言語文化学の発展に些少なりとも貢献しうるよう、今後も長く継続されることを期待したい。

佐　高　春　音
鈴　木　大　介
田　中　智　行
中　直　一
中　村　綾　乃
平　山　晃　司
三　浦　あ　ゆ　み
渡　辺　貴　規　子
任　天　樂

言語文化共同研究プロジェクト 2024

言語文化の比較と交流 12

目次

佐高春音 容与堂本『水滸伝』「李卓吾評」に関する初步的研究 —人物批評に注目して—.....	1
中直一 森鷗外訳の翻訳流儀 —「玉を懷いて罪あり」を手掛かりに—.....	11
中村綾乃 駐日大使ゾルフ② —文人大使の交流—.....	23

容与堂本『水滸伝』「李卓吾評」に関する初步的研究 —人物批評に注目して—

佐高春音

1はじめに

明清時代の通俗小説は、「評点」を備えた形で刊行されたものが多い。評点とは、評語や批語と呼ばれる評者によるコメントと、一般に圈点と呼ばれる記号類の総称である。有名人の評点が付された書物は付加価値がつき、より売り上げが見込まれることから、偽托も横行した。明末の著名な思想家・李卓吾（李贊）は、とりわけ多くの書物にその名が掲げられている。『水滸伝』に限っても、本稿で扱う「容与堂本」をはじめとして、複数の版本が「李卓吾評」を標榜している。現在知られているものを以下に示す。

- ・ 「李卓吾先生批評忠義水滸傳」全100回（通称「容与堂本」）
- ・ 「忠義水滸傳」全100回（通称「無窮会藏本」）¹
- ・ 「忠義水滸全傳」全120回（通称「全伝本」）²
- ・ 「水滸傳全本」全30回（通称「三十巻本」）³

李卓吾が『水滸伝』に評点を付し、それが書物として刊行されたことを示唆する記録として、李卓吾の友人である袁中道の日記「遊居柿錄」があり、万曆四十二年の出来事として、以下のことが語られている。

袁無涯來、以新刻卓吾批點水滸傳見遺、予病中草草視之。記萬曆壬辰夏中、李龍湖方居武昌朱邸、予往訪之、正命僧常志抄寫此書、逐字批點⁴。

（袁無涯がやって来て、新刻の李卓吾批点『水滸伝』を置いていったので、私は病に臥せる中、ざっと目を通した。記憶では、万曆壬辰の夏、李龍湖〔李卓吾を指す〕は武昌の朱邸におり、私が訪問すると、ちょうど僧の常志に命じてこの書を書き写させ、逐字批点を加えていた。）

李卓吾評を標榜する『水滸伝』の中で、特に容与堂本と全伝本は、真筆である可能性について盛んに議論されてきた。しかし、魯迅が『中国小説史略』の中で「どちらも浅薄であり、おそらく葉昼の輩が偽托したものであろう。（『書影』第一巻に詳しい）」⁵と述べるように、葉昼という人物による偽托とする説も広く知られている。『書影』は蔵書家としても知られる明末清初の文人・周亮工が記した隨筆集で、別名を『因樹屋書影』と言い、その第一巻に葉昼についての記述がある。

葉文通、名晝、無錫人。多読書、有才情。……中略……當溫陵『焚』、『藏』書盛行時、坊間種種借溫陵之名以行者、如『四書第一評』、『第二評』、『水滸傳』、『琵琶』、『拝月』諸評、皆出文通手⁶。

（葉文通、名は晝〔昼〕、無錫の人である。多くの書物を読み、優れた才を持つ。……

¹ 封面題「李卓吾先生評繪像水滸傳」。なお本稿では、原則として原典資料の引用にはもとの字体を使用し、その他については常用漢字体を用いる。

² 引首題「新鐫李氏藏本忠義水滸全傳」。全伝本を覆刻した「忠義水滸全書」と題する系統もあり、あわせて百二十回本と呼ばれている。

³ 文簡本。パリ国立図書館蔵本の封面題「李卓吾原評忠義水滸全傳」、東京大学蔵本の封面題「李卓吾先生評水滸全傳」。

⁴ 袁中道「遊居柿錄」卷九（『珂雪齋集』下冊、上海古籍出版社、1989年、1315頁）。

⁵ 魯迅『中国小説史略』（齊魯書社、1997年、117頁）。原文「両皆弇陋、蓋即葉昼輩所偽托。（詳見『書影』一）」。

⁶ 周亮工『書影』第一巻（上海古籍出版社、明清筆記叢書所収、1981年、9頁）。

中略……温陵〔李卓吾を指す〕の『焚書』、『藏書』が盛行した時、坊間で温陵の名を借りて刊行された様々なもの、たとえば『四書評』の第一評、第二評、『水滸伝』、『琵琶』、『拝月』などは、みな文通の手によるものである。)

上記のほか、明代の文人・錢希言の『戯瑕』卷三「賡籍」にも、李卓吾評を標榜する複数の書籍が、いずれも葉昼の手によるものであることを指摘する記述がある。廣澤裕介氏は、錢希言が列挙した書籍の半数が容与堂の刊行物と重なることなどから、「名指しこそしてはいないが、その矛先は容与堂に向いていると見て大過あるまい」との見解を示している。⁷

容与堂本の評者が葉昼であるのか、それとは別の人物であるのか、あるいは本当に李卓吾であるのか、現在のところ、決定打となる説が出るには至っていない。本稿では、評者が誰かという問題には深入りせず、李卓吾の名を冠する容与堂本の批評（便宜のため、以降「容評」と称す）として扱う。

容評に焦点をあてた研究は、川島優子氏が評中に頻出する「畫」「妙」といった一文字の評語に着目して精緻な分析を行うなど⁸、近年少なからず進展が見られるものの、依然として数が多いとは言えず、更なる検討の余地を残している。そこで、本稿では、容評における人物批評に注目し、その特徴についてあらためて検討してみたい。より具体的には、白話小説における評語が、作中人物についてどのように語るか——どのような表現や形式によって、どのような内容を述べあらわすか——という点に焦点を当てる。調査・整理段階の点も多く、初步的な考察にとどまるものではあるが、評点研究に些かでも新たな視点をもたらすことを期す。

2 容与堂本とその評点の概要

容与堂本⁹:

卷首題「李卓吾先生批評忠義水滸傳」。100巻、100回。序文に万暦三十八年を示す記述があり、明万暦の刊行と目される¹⁰。

- 版式：四周单邊、有界、每半葉11行22字、白口、单黑魚尾。
- 評語：眉批、傍批、夾批、回末總評¹¹。
- 圈点：マル「○」、傍線、カギ括弧¹²。

回中の評語は眉批と傍批が主であり、ごく稀に夾批が見える。一文字から數文字の短い評語を主とし、単語や短い句のまとまりが多くを占める。回の末尾には数行の総評が置かれ、「李卓吾曰」「李禿翁曰」「李和尚曰」などの形式により、李卓吾の言として記されている。本文中の注目すべき箇所や批評の対象となる箇所は、文字の右横にマルを付して強調される。評者が批判的な見解を示す箇所には傍線が引かれることが多く、削除すべき（「可刪」）と判断する部分はカギ括弧で括られる。

現存する『水滸伝』の中で最も古いものは、嘉靖年間の刊行と目される通称「嘉靖本」（卷首題「忠義水滸傳」）である。嘉靖本は第47回から第49回および第51回から第55回の計8回分のみが残存しているが、そこには評語や圈点は一切

⁷ 廣澤裕介「明末江南における李卓吾批評白話小説の出版」（『未明』第24号、2006年、8頁）。

⁸ 川島優子「容与堂刊『李卓吾先生批評忠義水滸傳』の評語に関する考察：「畫」を中心として」（『東方学』第136輯、2018年）、同氏「『李卓吾先生批評忠義水滸傳』における評語「妙」に関する小考」（『明清文学論集 その楽しさ その広がり』東方書店、2024年）。

⁹ 容与堂本の引用は、『明容與堂刻水滸傳』（上海人民出版社、1975年）による。なお、本稿で引用する『水滸伝』各版本の原文中の句読点は筆者が付したものである。

¹⁰ 当該の序文は、現存する容与堂本系諸本の中で、内閣文庫蔵本のみが有している。

¹¹ 本文の上欄に記される評語を「眉批」、本文の文字横に記される評語を「傍批」、本文中に小字双行で割書される評語を「夾批」と呼ぶ。

¹² 文の区切りや間を示す句読点に類する記号の使用法は認められない。

見られず、全体も同様であった可能性が高い。『水滸伝』は初め評点のない形式で刊行され、後に評点を備えるようになったと考えられる。現存する『水滸伝』の中で、容与堂本は最も早期に評点が施された版本にあたる。

容与堂本の回中に見られる評語は、一文字から数文字の短いものが主であることはすでに述べたが、とりわけ一文字の評語は出現頻度が高く、容評を特徴づける要素の一つとなっている。この一文字評に関して、まず川島優子氏の研究を紹介しておきたい。同氏は一文字評の各語に異なる使用傾向が認められることを指摘している。たとえば、最も出現回数の多い「畫」は、絵のようにリアルな描写を評価する語であり、描写が優れた場面に付与されるが、主人公たちではなく周辺の小人物たちの姿を描く際に付される傾向があるという。また「畫」に次いで多く用いられる「妙」は、素晴らしい・巧みであるといった意味の賞賛の語であり、台詞回しや場面がコミカルであるなど、「笑い」と結びつく場面に付される傾向があるという¹³。

容与堂本の一文字評には、前述の「畫」「妙」に加え、細かなニュアンスは異なるものの、いずれも素晴らしいこと評価する語である「好」「佛」「趣」、正しい・賛同できることを示す「是」など、賞賛や肯定をあらわす語が多く見られる。また、愚かであることを意味する「痴」、悪質・非道であることを示す「賊」「惡」などのように、否定や批判を示す語も用いられる。これらの一文字評は、読者に対する解説としての性格よりも、評者がその時々に感じたことをそのまま言葉にしたかのような、感情の表出に近い性格を強く帶びていると言えよう¹⁴。

3 容与堂本の人物批評

(1) 「人物を描くこと」への眼差し

容与堂本には、絵のようにリアルな描写を評価する「畫」や「如畫」、真に迫っていることを意味する「逼真」、形容が巧みであることを称える「好形容」といった評語がしばしば見られる。これらの評語は、いずれも「如何に描くか」という小説の語りの問題に対する関心を示している。また、「如何に人物を描くか」という点については、下記の総評に注目すべき指摘がある。

- ・ 第3回総評：如魯智深、李達、武松、阮小七、石秀、呼延灼、劉唐等衆人、都是急性的、渠形容刻畫來、各有派頭、各有光景、各有家數、各有身分。
(魯智深、李達、武松、阮小七、石秀、呼延灼、劉唐といった人々は、いずれも短気な性格だが、彼らを克明に描き出すにあたり、それぞれ異なる風格があり、姿があり、系統があり、身分がある。)
- ・ 第24回総評：說姪婦便象箇姪婦、說烈漢便象箇烈漢……(中略)……姪婦、烈漢、呆子、馬泊六、小猴子、光景在眼。姪婦、烈漢、呆子、馬泊六、小猴子、聲音在耳。
(淫婦を語ればまさに淫婦らしく、豪傑を語ればまさに豪傑らしい……(中略)……淫婦、豪傑、間抜け者、遣手婆、小僧の姿が目に見える。淫婦、豪傑、間抜け者、遣手婆、小僧の声が耳に聞こえる。)

『水滸伝』には、第3回総評に名が挙げられている魯智深・武松・李達らをはじめとして、粗野で直情的な性格を持つ作中人物が多く登場する。しかし、似た類型に属する人物であっても、それぞれには異なる個性があり、その違いが描き分けられていることを容評は指摘する。さらに、その点は周辺人物にも及び、主役・

¹³ 注8 前掲論文。

¹⁴ 鄧雷氏は、容与堂本の評語を「きわめて強烈な感情が潜んだ評語の中で、評者の態度を表明するだけでなく、更には鋭い言葉で小説中の人物や事柄を批判することもある」と評している。鄧雷「明代『水滸伝』評点的歴史変遷」(『内江師範学院学報』第29巻第3期、2014年、8頁)原文「除了極其強烈的感情潛藏在容本批語文字中表明評者的態度之外、更有甚者以尖銳的話語批判小說中之人與事」。

脇役を問わず、本当に実在するかのような真実味を持って描き出されていることを述べる。

上記の総評が見える第24回は、『水滸伝』の中でも特に名文として名高い「武松の西門慶・潘金蓮殺し¹⁵」の一幕にあたり、「姪婦」は潘金蓮、「烈漢」は武松、「呆子」は武大、「馬泊六」は王婆、「小猴子」は鄆哥¹⁶を指す。同様の評語は回中にも見られる。潘金蓮の誘惑をきっぱりと拒絶した後、何も知らずにやって来た武大に声をかけられるが、返事をせずにそのまま家を後にする武松と、何があったのかと尋ねる武大に対して怒鳴り散らす潘金蓮の姿が描かれる場面に、以下の眉批が付されている。

將一箇烈漢、一箇呆子、一箇姪婦人、揃寫得十分肖像、真神手也。

(一人の豪傑、一人の間抜け者、一人の淫婦を、それぞれ十分にそれらしく描いており、まさに素晴らしい筆致である。)

潘金蓮が罵るセリフには「昼〔畫と同義〕」の傍批も見える。また、第45回には潘巧雲という別の淫婦が登場するが、彼女の言動にも「把姪婦姪態一一畫出（淫婦の淫らなさまを一つ一つ描き出す）」、「把姪婦情狀刻画逼真（淫婦の様子をリアルに描き出す）」などの指摘があり、「昼」も多く付されている。作中の淫婦たちは、主人公たちから憎まれる脇役人物であるものの、その描き方に対して、評者は高い評価を示している。

『水滸伝』における作中人物の造形とその描き方への評価という点では、作品の本文を大幅に改変し、大量の評点を付して独自の『水滸伝』（いわゆる「金聖歎本」）を刊行した明末清初の文人・金聖歎による言論がよく知られている。たとえば、金聖歎本の巻頭に置かれた序文および「讀第五才子書法」には、次のような記述がある。

- ・ 「序三」：水滸所敍、敍一百八人、人有其性情、人有其氣質、人有其形狀、人有其聲口。

(『水滸伝』の叙述は、108人を叙述するのに、人々にはそれぞれの性情があり、気質があり、姿があり、声がある。)

- ・ 「讀第五才子書法」：水滸傳寫一百八箇人性格、真是一百八樣。／水滸傳只是寫人麤齒處、便有許多寫法¹⁷。

(『水滸伝』は108人の性格を描いており、本当に108通りである。／『水滸伝』は人物の粗野なところを描くだけでも、多くの描き方がある。)

上記に見られる観点は、先に挙げた容評と共通するところが多い。金聖歎本の底本は百二十回本（全伝本と全書本の系統の総称）だが、容与堂本もあわせて参照していたであろうことが先行研究によって指摘されている¹⁸。ただし、金聖歎評の場合には、これらの指摘のみならず、類似した性格を持つ人物の間にどのような違いがあるのか、それがどのような言動から読み取れるのかといった点についての細かな考察が随所に見られる。また、たとえば潘金蓮の動作——「一只手便去武

¹⁵ 物語の概要：潘金蓮は醜い夫・武大を嫌い、義弟の武松を誘惑するが拒絶される。武松の留守中、彼女の美貌に目をとめた西門慶と密通し、二人とその仲立ちをした王婆は結託して武大を毒殺する。家に戻った武松は真相を暴き、兄の仇討ちをする。

¹⁶ 武松の手助けをする梨売りの少年。

¹⁷ 金聖歎本の引用は、古本小説集成所収『第五才子書水滸傳』（上海古籍出版社、1990年）による。

¹⁸ 竹下咲子「金聖歎批評の源流を探る——百二十回本『水滸伝』李卓吾批評を中心に」（『和漢語文研究』第7号、2009年）など。

松肩胛上只一捏（もう一方の手で武松の肩をきゅっと掴む）」——の直後に、「寫姪婦便是活姪婦（淫婦を描くと、まさに生きた淫婦となる）」という割書の評語を挿入するなど、その人物らしさをあらわす叙述に対して、より具体的な指摘と分析を数多く行っている。

容評が評価と指摘のレベルにとどまるのに対し、金聖歎評は全篇にわたって施した膨大な評語を通して、洗練された文学理論を提示する¹⁹。両者が同じ次元にあるとは言えないが、人物の造形とその描き方に関する金聖歎の視点は、突如として現れた全く新しいものというわけではなく、その萌芽がすでに容評に見られることを見落とすことはできない。

（2）「人物そのもの」への眼差し

容与堂本には、作中人物がどのような人物であるか——どのような性質を持った人物であるか——ということに言及する評語が数多く見られる。本稿ではその中でも、人物の性質に関して、「○○は△△な人である」「△△である」と簡潔かつ断定的に述べる評語に着目し、その概要を示す。仮にこの種の評語を「性質断言型の評語」と呼ぶこととする。

当該の評語は、前掲の総評にも名が挙げられていた武松・魯智深・李逵といった人物たちに多く用いられており、彼らの肯定的な側面が強調されている。特に李逵は同種の評語が際立って多く、第38回で初登場して以降、その活躍が描かれるたびに、李逵がどのような人物であるかということが、繰り返し評中で示される。以下にその例を挙げよう²⁰。なお、同一回内で同じ表現が複数回用いられる場合は引用を省略し、日本語訳は初出の語句にのみ付す。

【性質断言型の評語：李逵】

- ・ 第38回：妙人（素晴らしい人）／李大哥真是大雅（李の兄貴は真に超俗的である）
- ・ 第39回：快人（さっぱりした人）
- ・ 第40回：真忠義、真好漢（真に忠義、真に好漢）／妙人
- ・ 第41回：真忠義／妙人／李大哥當是不食烟火人（李の兄貴はまさに凡人ならざる人である）
- ・ 第42回：孝子（孝行者）／天性孝子（生まれながらの孝行者）
- ・ 第43回：好箇直性人（なんとも真っ直ぐな人）／李大哥纔是孝子（李の兄貴こそが孝行者である）／李大哥真是言不必信、行不必果的大人（李の兄貴はまさに“ただ義に従う”大人物である）²¹／亦是妙人、亦是孝子（“妙人”でもあり、孝行者でもある）／孝子弟弟（孝行な子）
- ・ 第47回：李大哥畢竟是個趣人（李の兄貴はやはりおもしろい人である）
- ・ 第50回：妙人
- ・ 第52回：真忠義／大聖人（偉大な聖人）／李大哥真活佛（李の兄貴は真に生きた仏）
- ・ 第53回：直人、快人（真っ直ぐな人、さっぱりした人）／妙人／快人／

¹⁹ 金聖歎の文学理論については多くの先行研究がある。鐘錫南『金聖歎文学批評理論研究』（上海古籍出版社、2006年）、楊清惠『文法——金聖歎小説評点之叙事美学研究』（大安出版社、2011年）、周淑婷『金聖歎小説叙事理論研究』（広西師範大学出版社、2022年）など。

²⁰ 本稿で挙げる用例は、現時点で確認できた範囲のものであり、網羅的な一覧には至っていない。今後の調査・整理により、追加・修正が生じる可能性がある。また、「性質断言型」として扱う評語の範囲についても、今後慎重に検討していく必要がある。しかしながら、本稿の段階においても、全体の傾向を示すことは可能である。

²¹ 『孟子』「離婁章句」の「大人者、言不必信、行不必果、惟義所在（大人物は、言葉が全て信義にかなう必要はなく、行動が全て成果を伴う必要もなく、ただ義にかなっていればよい）」を踏まえる。

真忠義

- ・ 第 54 回：李大哥纔是箇真人（李の兄貴こそが眞の道を体得した人である）／真忠義／李大哥是箇忠義漢子（李の兄貴は忠義の男である）
- ・ 第 61 回：妙人
- ・ 第 67 回：妙人／李大哥真是異人（李の兄貴は眞に常人離れした人である）
- ・ 第 68 回：妙人
- ・ 第 71 回：真忠義／李大哥是箇天民（李の兄貴は天理に通じた人である）
- ・ 第 72 回：妙人
- ・ 第 73 回：奇人（特異な人）／眞人（眞の道を体得した人）／眞漢子（眞の男）／李大哥真是忠義漢子（李の兄貴は眞に忠義の男）／妙人／眞漢
- ・ 第 74 回：李大哥是母意必固我者也（李の兄貴は自らの意見に固執しない人である）／妙人／李大哥是聖人（李の兄貴は聖人である）
- ・ 第 92 回：真忠義／李大哥纔是言顧行、行顧言底君子（李の兄貴こそが言行一致の君子である）
- ・ 第 95 回：豪傑
- ・ 第 100 回：好直性人（なんとも眞っ直ぐな人）／真忠義

李達に対する評語として頻繁に登場するのが「妙人」という表現である。川島優子氏は、一文字評「妙」が李達の言動に多く付されることを指摘しており、李達という人物を語るうえで、「妙」が中心的な語となっていることがわかる。「妙人」とは、「妙」があらわす称賛に値する人物であることを示しており、李達はまさに「妙」の体現者として扱われているといってよい。たとえば武松にも「妙人」が付されているが、使用頻度は李達と比べて格段に少ない。

「真忠義」も、とりわけ李達に多く付されている評語の一つである。この「忠義」の語については、笠井直美氏に詳細な論考がある。同氏は容評に見える「忠義」について、その意味を「損得や結果にこだわらず、わが身の犠牲を顧みず、甚だしくはわが身を捨てて、他人のために力を尽くすこと」と概括し、その対象は「仲間、兄弟分」が最も多いと述べる²²。李達の場合、当該の「忠義」は、主として彼が兄貴分として慕う宋江に向けられている。このほか、第 42 回と第 43 回に「孝子」の語が集中して見られるのは、老いた母親を梁山泊に迎え入れるために帰郷した李達が、母を虎に食われ、その仇討ちをするというエピソードが語られるためである。

筆者は以前、容与堂本『水滸伝』における、作中人物の性質について「○○は△△な人である」と断定的に述べる地の文に着目し、調査と分析を行ったことがある。その結果、当該の叙述の出現には偏りがあり、特定のエピソードにおける特定の人物に集中していることが明らかとなつた²³。今回は再びこの種の地の文（本稿の用語に合わせ「性質断言型の地の文」と呼ぶこととする）を取り上げ、評語と対照してみたい。まず、以下に李達の例を挙げる。

【性質断言型の地の文：李達】

是個殺人不斬眼的魔君（人を殺しても瞬き一つしない魔王である）〔第 43 回〕／性急（短気）〔第 53 回〕／膽勇過人（並外れた胆力と勇気）〔第 63 回〕／是箇好殺人的漢子（人殺しを好む男である）〔第 92 回〕／是箇不怕天地的人

²² 笠井直美「隠蔽されたもう 1 つの「忠義」——『水滸伝』の「忠義」をめぐる論議に関する一覧点」（『日本中国学会報』第 44 集、1992 年）。なお、一般に考えられている「朝廷に対する忠誠」を意味する「忠義」の使用が皆無ではないことについても言及がある。

²³ 詳しくは、拙論「『水滸伝』の語りをめぐる考察——人物描写を中心に」（『東方学』第 126 輯、2013 年）。

(何ものをも恐れない人である) [第 95 回]

評語とは異なり、地の文には必ずしも肯定的とは言えない表現が並ぶ点に注目したい。ここでは主として李達の豪胆かつ容赦のない性質が語られている。言うまでもなく、作中人物の人となりは、風貌・行動・発言・感情・思考など多様な要素を通して描き出されるものであり、語り手が前面に出て説明した内容が全てというわけではない。李達についても、評者は本文における間接的な人物描写の中から、自らの価値観に合致した側面を積極的に読み取り、自らの心中に像を結んだ李達への評価や思いを、評語の中で表出していると言える。

一方、『水滸伝』の物語の中核をなす人物である宋江は、小説の本文と評語における扱いが李達とは対照的である。第 18 回で宋江が初めて登場した際には、まずその容姿や名声を謳いあげる美文が挿入され、次いで地の文の中で名前・家族・職業・愛好・資質・評判などが説明され、最後に再び宋江を称える詩が挿入される。このために一葉以上の紙幅が割かれるという破格の扱いとなっている。さらに、初登場以降もその人柄について説明されることが度々あり、中でも「宋江の閻婆惜殺し」のエピソードを描く第 21 回には、性質断言型の地の文が集中的に見られる。以下に例を挙げる。

【性質断言型の地の文：宋江】

是箇好漢（好漢である）／是箇好漢胸襟（好漢の度量である）／是個快性的人（さっぱりした人である）／是箇眞實的人（律儀な人である）／是箇勇烈大丈夫（勇敢で気骨がある大丈夫である）／爲人最好（人柄がこの上なく良い）
〔全て第 21 回〕

地の文では宋江の肯定的な性質が繰り返し強調されている。しかし、地の文で語られるような性質を容評が評価することは殆どない。以下に評語の例を挙げる。

【性質断言型の評語：宋江】

的確是箇假道學（まさに偽の道学である）〔第 36 回〕／孝子（孝行者）〔第 42 回〕／假道學、真強盜（偽の道学者、眞の強盗）〔第 55 回〕／宋公明只是箇黃老之術（宋公明はただの道学的な人間である）〔第 64 回〕／是箇老賊（悪人である）〔第 71 回〕／秀才氣（小利口な気質）〔第 83 回〕／婆子氣（女々しい気質）〔第 90 回〕／痴人（愚かな人）〔第 100 回〕

上記の中で唯一肯定的な性質と言えるのは「孝子」であろう。しかし、第 35 回の眉批には「宋太公是大慈父、只是宋公明不曾做得孝子（宋太公は慈愛に満ちた父であるが、宋公明はこれまで孝行者であったことがない）」という記述もあり、評価に齟齬がある²⁴。このほかはいずれも宋江の否定的な性質が強調されており、「老賊」といった強い罵詈語も見られる。「秀才氣」と「婆子氣」は、仲間を失って泣き声を上げる宋江の行動に対して付されたものである。宋江は作中でしばしば涙を見せるが、容評ではその涙が真心からのものとは見なされておらず、第 92 回の総評には「假哭、信他不得（嘘泣きである。信じてはいけない）」と述べられている。

明代中期におこった新たな儒教の一派・陽明学のうち、陽明学左派の系統に属する李卓吾は、「童心説」をとなえ、人が生まれながらに有する偽りのない真心、

²⁴ 宋江は第 18 回に初登場する際の地の文で、「又且于家大孝、爲人仗義疎財、人皆稱他做孝義黑三郎（さらに大変な孝行者で、義を重んじ財を疎む人となりであったため、人はみな彼のことを孝義の黒三郎と呼んだ）」と語られており、孝行者として設定されている。

すなわち「童心」の大切さを説いた。そして、その童心を失わせるのは、道理や見聞であるとした。李達の真っ直ぐで偽りのない点を高く評価し、宋江の虚飾（作品本文で直接的に語られるわけではないが、少なくとも評者はそのように理解している）を否定的に捉える容評には、それが真に李卓吾によるものであるかは別として、確かにその思想に通じる価値観が見てとれる²⁵。

（3）二つの眼差しをめぐって

容与堂本の人物批評からは、二つの眼差しと評価軸が見いだされる。一つは「人物を描くこと」に向けられた眼差しであり、その評価の焦点は文章表現の巧拙にある。本節第1項で述べた通り、「畫」「如畫」「逼真」「好形容」といった評語や、総評における人物の造形と描写に関する指摘などが、そのことを示している。もう一つは、「人物そのもの」に向けられた眼差しであり、その評価の焦点は作中人物の人格の優劣にある。第2項で取り上げた李達に対する称賛の評語や、宋江に対する否定の評語が示す通り、評者は作中人物の性質に注目し、自身の価値観に照らして、その性質が優れているか否かを問題にしている。

当然のことながら、人物が巧みに描かれていることと、その人物が人格的に優れていることとは、まったく別の問題である。品性の劣った人物を的確に描き、読者に嫌悪感を抱かせることができれば、それは文学として成功と見なされるであろう。実際、潘金蓮や潘巧雲といった淫婦たちは、評者からその人格が評価されているわけではないが、先述の通り、彼女たちを描き出す文章の巧みさに対しては高い評価が与えられている。しかし、宋江の場合には、その描かれ方に対する賞賛の語が並ぶわけでもなく、作中人物の好ましくない側面が「巧みに」描き出されているという認識とも異なるようである。

つまり、容評には「人物を描くこと」と「人物そのもの」への二つの眼差しが併存しているが、これらはすべての人物に等しく向けられるわけではない。李達には両方の眼差しが向けられており——中でも後者の方がより熱を帯びた眼差しであると言えよう——、淫婦たちは「人物を描くこと」への眼差しが、宋江には「人物そのもの」への眼差しが、主として向けられているものと理解できる。

二つの眼差しのうち、より容評を特徴づけているのは、「人物そのもの」への眼差しと言うべきであろう。白木直也氏は、第4回において魯智深の言動に集中して付される「佛」「佛性」（いずれも仏心を備えていることを称える語）を取り上げ、「評語が最簡であるが故に却って智深の言行の一つ一つをピシッピシッと決めつけてゆく評者の気迫、とても絵空事の中の架空の人物を扱っているとは思へぬ真剣味さへ覚えしめる」と述べており²⁶、この見解には大きく頷かされる。

白木氏の言う「架空の人物を扱っているとは思へぬ」という点に関しては、評中の人物呼称にも注目すべき特徴が見られる。容評は作中人物を愛称で呼ぶことがあり、特に顕著なのが李達である。前項の例にも見える通り、「李大哥（李の兄貴）」という表現が度々用いられ、第52回の総評では「我家的阿達（うちの達ちゃん）²⁷」とまで称されている。このほか、武松を「武二」、石秀を「石家三郎」、

²⁵ 李卓吾の思想については、阿部亘「李贊 明末「異端」の言語世界」（早稲田大学出版部、2022年）を参照した。なお、同じく李卓吾評を標榜する全伝本は宋江に対して肯定的な評語を付しており、両者の価値観には違いが見られる。他方、金聖歎評は李達を絶賛し宋江を容評以上に徹底して批判している。このように、宋江への評価はばらつきがあるが、李達への評価が高い点は三者に共通する。人物評価とその思想的背景にアプローチする研究としては、井上浩一氏に一連の研究がある。井上浩一「『忠義水滸全伝』における「李卓吾先生評」の人物評価について」（『中国古典小説研究』第4号、1998年）、同氏「宋江評価に見る金聖歎評の一特徴 一金聖歎評に関する先学の論点整理を手掛かりとして一」（『集刊東洋学』第81号、1999年）など。

²⁶ 白木直也「一百二十回水滸全伝の研究—其の「李卓吾評」をめぐって—」（『日本中国学会報』第26集、1974年、110頁）。

²⁷ 親しみをこめて呼ぶ際に、名前の前に「阿」をつけることがある。

燕青を「小乙」などの愛称で呼ぶ例も見られる。一方、宋江については「宋公明」と字で称することがある。字は一般に敬意を示すが、宋江に対する評者の全体的な態度を踏まえると、李達らへの親しみのこもった表現とは異なり、一定の距離感や冷淡さを感じさせる。このような人物呼称も、容評における「人物そのもの」に向けられた眼差しの一端を示していると言える²⁸。

4 全伝本「李卓吾評」との比較

最後に、同じく「李卓吾評」を称する全伝本の評語（以下「全伝評」と称す）との違いについても軽く触れておきたい。なお、全伝本は不分巻百回本系統の版本（遺香堂本や芥子園本を代表とする、鄧雷氏が「大滌餘人序本」と称する系統の版本）ときわめて近い関係性にあり、評語の内容も多く一致している²⁹。したがって、本稿で言う「全伝評」は、必ずしも『忠義水滸全傳』固有のものではないことを予め断っておく。

全伝本³⁰：巻首題「忠義水滸全傳」。不分巻、全 120 回。明崇禎以降の刊行と目されている。

- ・ 版式：四周单邊、無界、毎半葉 10 行 22 字、白口、無魚尾。
- ・ 評語：眉批、傍批、回末総評。
- ・ 圈点：マル「○」、テン「丶」³¹。

全伝本の底本は容与堂本そのものではないが、先に挙げた容与堂本第 24 回の総評「將一箇烈漢、一箇呆子、一箇姪婦人、描寫得十分肖像、真神手也」とほぼ同文の評語³²が同回の眉批に見られることなどから、一部の評語は容評を参照して引き写された可能性が指摘されている³³。しかしながら、そのような類似は例外的であり、両者の殆どの評語は、形式面・内容面のいずれにおいても大きく異なっている。

容評が一文字から数文字の短い眉批と傍批を主とし、単語や短い句のまとまりが多いのに対し、全伝評はより長い文の形式が多く、それらは主に眉批として付されている。容評に頻出する一文字評の形式はきわめて少ない。回末には「評」から始まる数行の総評を置くが、これは容評の「李卓吾曰」などから始まる形式とは異なる。また、本文中の注目すべき箇所や批評の対象となる箇所を示す際には、マルに加え、容評には使用のなかったテンも併用されている。

続いて、両者の人物批評を比較してみる。容評に人物の造形と描写に対する指摘が見られることは先に述べた通りだが、全伝評ではそれが更に深化している。たとえば、第 24 回の潘金蓮らのエピソードにおいて、西門慶が偶然を裝って潘金蓮と対面する場面には、「如見（見えるかのよう）」「活現、如聞其聲（生き生きと現れている。その声が聞こえるかのよう）」、第 21 回の宋江と閻婆惜の会話場面には「一番交口、如見如聞、甚妙（一連の会話は、見えるかのよう、聞こえるかのようで、甚だ素晴らしい）」、第 23 回「武松の虎退治」の一幕には、「此一段寫得形聲具出、一幅打虎圖、活虎活人俱在眼前（この一段は形と声が共に現れてお

²⁸ 地の文における人物呼称については、拙稿「『水滸傳』の人物呼稱に見える待遇表現」（『日本中国学会報』第 68 集、2016 年）で論じている。

²⁹ 小松謙『水滸伝と金瓶梅の研究』（汲古書院、2020 年）、鄧雷『水滸伝版本知見録』（鳳凰出版社、2017 年）に版本の継承関係に関する詳しい考察がある。

³⁰ 底本には東京大学東洋文化研究所倉石文庫蔵本（東京大学アジア研究図書館デジタルコレクション、「忠義水滸全伝 一二〇回図一巻」、請求記号：倉石文庫 41973）を用いる。

³¹ 全伝本では、句読点に類するテンやマル、人名を示す傍線など、機能性の記号も用いられ、より読者が読みやすい工夫がなされている。

³² 將一箇烈漢、一箇呆子、一箇姪婦人、描寫得十分肖象、真神手。

³³ 黄霖「『水滸全伝』李贊評也属偽託」（『江漢論壇』、1982 年第 1 期）。

り、まるで一幅の虎退治の絵、生きた虎と生きた人間が共に目の前にいるかのよう）」といった指摘がある。

容評にも「光景在眼」「聲音在耳」という表現が見られたが、全伝評ではより細かい指摘が増えているとともに、容与堂本の「如何に人物を描くか」から一步進み、「如何に人物を活現するか（生き生きと現すか）」という観点がより鮮明になっている。後出の金聖歎本へと繋がっていく、文章表現に対する意識の深化の流れが見てとれる。

人物に対する評価の方向性について見てみると、李達に対しては「黒旋風稟忠直之性、一味莽撞、大有可用處、好打強漢、最是快人（黒旋風〔李達の二つ名〕は忠実で正直な性質、唯々無鉄砲だが、大いに役立つところがあり、強者と戦うことを好み、最もさっぱりした人）」〔第38回〕といった評語があり、容評と同様に高く評価されている。一方、宋江は容評において否定的な評価が目立ったが、全伝評では対照的に高い評価が与えられており、その行動の正当性を強調するような解説も付されている。たとえば策略を用いて朱仝を梁山泊に引き入れた際には、「又須知是重義憐才、不是勾人落草（〔宋江の行動は〕義を重んじ才を憐れむもので、人を騙して山賊にさせるようなものではないことを知るべきである）」〔第51回〕、同様に関勝を引き入れた際には「如非公明義氣深重、恐關勝不爲用也（公明が義に厚い人物でなければ、関勝が従うこととはなかったであろう）」〔64回〕と述べるなど、宋江の義気が強調されている。

批評の表現においては、両者の間に顕著な違いが認められる。本稿で性質断言型と名付けた、人物の性質を簡潔かつ断定的に述べる形式の評語は、全伝評にはあまり見られない。李達には「孝子、真忠臣」〔第39回〕「真義士、真忠臣」〔第73回〕といった同種の評語が確認できるものの、容評と比べて圧倒的に少ない。また、評中における人物の呼称についても、基本的には姓名が用いられており、黒旋風や宋公明といった二つ名や字の使用はあるものの、容評に頻出する「李大哥」のような親しみを込めた愛称は確認されない。

全伝本は正文の前に「發凡」を付し、評点の機能として「通作者之意、開覧者之心（作者の意を通じさせ、読む者の心を開く）」を挙げている。総じて、全伝評は、容評のように評者自身の感情を表出することよりも、読者の理解を導くことに重点を置く。容評には「人物そのもの」への眼差し、とりわけ評者の感情がこもった熱い眼差しが認められたが、全伝評においては、一歩引いたところから物語世界と作中人物たちを眺める、より観察的な眼差しが認められる。

5 おわりに

以上、本稿では、容与堂本『水滸伝』の評語が作中人物についてどのように語るかという点に注目し、考察を試みた。容評には、「人物を描くこと」と「人物そのもの」に対する、それぞれ異なる眼差しと評価軸が認められ、とりわけ後者が容評の特徴をなしていることを指摘した。また、評語と地の文において、作中人物への語りと評価の方向性に相違が見られる例についても紹介した。

容評が感情的な色合いを強く帯びていることは、一読して多くの読者が感じるはずであり、新しい観点とは言えない。しかし、具体例を挙げてそれを言語化する試みは、これまで十分に行われてこなかったように思う。本稿で取り上げた性質断言型の評語や、評中における人物呼称といった観点は、批評のスタイルを検討する上で、重要な糸口の一つになり得ると筆者は考えている。

反省点として、本稿では主に李達と宋江を例にとり、人物批評の用例を提示したが、全体像と概略を示すにとどまり、それぞれの評語がどのような文脈で用いられ、どのような意味をあらわしているのかについて、十分な分析を行うには至らなかった。また、用例の抜き出しについても、なお改善の必要がある。今後は調査の精度をより一層高めるとともに、個々の評語を丁寧に読み解く作業を進めていきたい。

森鷗外訳の翻訳流儀 —「玉を懷いて罪あり」を手掛かりに—

中 直一

1 はじめに

森鷗外の初期翻訳作品である「玉を懷いて罪あり」は、同時期の鷗外の翻訳作品の中にあって、とりわけ自由な翻訳ぶりが目立つ。この翻訳については、筆者自身、かつて論じたことがあるが¹、その論文執筆当時は、鷗外が翻訳底本に使用したドイツ語原文（鷗外文庫所蔵本）入手出来ず、また1889(明治22)年の『讀賣新聞』に掲載された初出も未見であった。今回、その両者を入手することが出来、改めて「玉を懷いて罪あり」の原文と鷗外訳、そしてその初出を検討する機会を得た。

前論文でも述べたように、「玉を懷いて罪あり」は、原文のかなりの部分を省略し、あるいは要約した形のものであり、翻訳とも抄訳とも言える独特の作品になっている。そして、単に短く切り詰めたのみならず、所どころ原作にない鷗外独自の描写が加えられ、時として鷗外自身の所感の如きものが差し挟まれる場合さえあった²。

大幅な省略・要約の合間に、原文にない付加がしばしば見られるという、独特的翻訳作品である「玉を懷いて罪あり」について、その付加と思しき部分を見ると、純然たる鷗外の創造的付加の他に、一見鷗外の創作に見えて、実は原作で後ろの方に記されている記述を鷗外が訳文の中で先取りして、前の部分に取り込んで訳しているものが散見される。

なぜ、このようなことが生じるのか。その理由を解明すれば、鷗外の翻訳流儀が垣間見えるのではないか。本論文は、先取り翻訳とも言える翻訳流儀のよって来る所以を解明することを以て任とするものである。あらかじめ結論めいたものを述べるならば、鷗外は、一字一句を原文と照らし合わせて訳す、という翻訳手法を取らず、むしろ原文の数行（時に数十行）をまとめて通読（かつ速読）し、その内容を記憶に留めた上で、原文の諸々の要素を再構成して、それを訳文に反映せしめたのではないか、と思われるのである。

そして、こうした「まとめ読み」「斜め読み」と記憶による翻訳流儀を鷗外が採用したと仮定すれば、「玉を懷いて罪あり」に見られる奇妙な「誤訳」（つまり、誤訳しそうにない所に現れる原文との乖離）についても、その理由が解明出来るのではないか。

本論文では、まず鷗外の「まとめ読み翻訳」とも言える実態を示し、次いで誤訳と思しき箇所の解説を行う。

2 描写の先取り

「玉を懷いて罪あり」は、ドイツの作家 E.T.A ホフマン (Ernst Theodor Amadeus Hoffmann, 1776-1822) の *Das Fräulein von Scuderi* 「マドモアゼル・ドゥ・スキュデリ」を訳したものである³。舞台は十七世紀ルイ十四世治下のフランスで、当時世間を騒がせていた路上連続宝石強盗殺人事件を取り上げている。主人公スキュデリはルイ十四世の宮廷に出入りする高名な女性詩人・作家で、国王からの信任あつく、また王の愛妃であるマントノン侯爵夫人からも尊重されている。そのようなスキュデリの館に、ある夜、見も知らぬ男が押し入り、応対に出た小間使いの女性に謎の小箱を押し付けるように渡して立ち去る。翌朝、その小箱をスキュデリが開けてみると、中には宝石をあしらった見事な装飾品がはいっていた。

¹拙論「森鷗外『玉を懷いて罪あり』における翻訳技法」(大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 言語文化の比較研究』2003年4月)。

²一例を挙げれば、上掲拙論 p.46 で論じたように、鷗外は全く原文にない「嗚呼、公衆と云ふものは果敢ないものだ。デグレエが来て人殺だと云へば、オリキエヽに石を投げ掛け兼ねぬ様な勢であつたが、今又た女學士が娘を不便だと云ふと、今まで面白がつて見て居た残酷な所作を何となく悪む心が生じ、涙をも溢ぼすものだ。此性質は何處の國でも、今も昔もかはらぬ」という、一般大衆の移ろいやすい正義感を嘆く文言を訳文の中に盛り込んでいる。

³ドイツ語原題について、岩波版全集後記には *Fräulein Scudery* と記されているが、これは鷗外手沢本の表記とは異なる。

謎の小箱を開けた場面の鷗外訳は、次のようになっている。

筐から出たのは金銀珠玉で惜氣もなく飾つた首飾と腕環とで手に持つたとき、窓から指しこんだ旭の光で、燐爛と光を發つた。 (pp. 109-110)⁴

上記引用文で点線アンダーラインを引いた部分⁵が、鷗外の訳文にのみ見られる文言である。つまり、翻訳底本では、小箱を開けると宝石がきらりと光る場面はあるものの、それが朝日に照らされたからというようなシーンではない。念の為、当該部分の原文と現代訳を以下に掲げる。(引用文中の原文 das Fräulein、現代訳「マドモワゼル」は、主人公スキュデリを指す。)

原文 : Wie erstaunte das Fräulein, als ihr aus dem Kästchen ein Paar goldene, reich mit Juwelen besetzte Armbänder und eben ein solcher Halsschmuck entgegen funkeln. (S.114)⁶

現代訳 : 函からぴかりと煌いて眼を射たのは、ふんだんに宝石を鏤めた金のブレスレット一対、それと似かよったネックレス、これを見てマドモワゼルのいかに驚いたことか。 (p. 304)⁷

ドイツ語原文には、宝石をあしらったブレスレットと腕輪が光を放った (funkelten) と記されるのみである。朝日云々の記述はない。筆者は原文と鷗外訳を対比した当初、朝日云々の記述を鷗外訳に発見して、これは訳者鷗外がいわば翻訳家としての分限をついつい越えて、作家的な創作衝動にかられ、朝日に映える宝石を描写した文言を訳文の中に盛り込んでしまったのではないか、と推測した。

だが、この箇所から少し進んだ所で、原文では再度宝石箱のシーンがあり、その部分で、カーテンの間から朝日が射しこんで宝石がきらりと光る、という場面がある。その部分の原文と現代訳を掲げる。

原文 : Die Sonne schien hell durch die Fenstergardinen von hochrother Seide, und so kam es, daß die Brillanten, welche auf dem Tische neben dem offenen Kästchen lagen, in röhlichem Schimmer aufblitzten. (S.115)

現代訳 : 太陽が、このとき、窓を覆っていた深紅の絹のカーテンを通して明るい光を送りこんできたので、テーブルの上に置かれて蓋のあいていた小函のなかにいくつもおさまっていたダイアモンドが、赤味を帯びた光をきらきらと放ったものである (p. 306)

原作では宝石がきらめく場面が二度あり、一度目は小箱を開けた時、そして二度目は朝日が射しこんできた時である。鷗外訳では、二度目の部分は訳されていない。そして、最初に小箱を開けた時に朝日が射しこんで来るという、原作の二度目の描写を先取りしている。つまり、一見すると創作的に付加されたと思われた鷗外訳の朝日のシーンは、鷗外が勝手気ままに付加した文言ではない、ということになる。

それでは、なぜ鷗外訳でこのような先取りが見られたのか。もし鷗外が意図的に変更の手を加えたのだとしたら、敢えて(翻訳としての忠実性を捨象してまで)朝日が射しこむ描写を小箱を開けるシーンに移し替えるべき何らかの合理的な理由があった筈である。

物語では、男が宝石箱を押し付けるように小間使いの女性に渡したのは夜間である。彼女は翌朝になって、前夜の一件を主人スキュデリに報告する。小間使いが小箱をスキュデリに渡すのはまだ早朝の時間帯であり、しかも原作では、小箱を開けるシーンの後に、それに添えられたスキュデリ宛ての手紙(紙片)をスキュデリが読んで驚愕する場面が長く続く。そういうするうちに朝の光が強くなり、カーテンの合間から光が差し込んで、テーブルに置かれた

⁴ 引用は『鷗外全集』第1巻(岩波書店、1971年)により、引用箇所(ページ)を本文中に括弧にくつて示す。なお引用に際し、筆者の使用するパソコンソフトの制約上、旧漢字や旧仮名を再現しきれなかった場合がある。また原文ではカタカナの固有名詞に傍線が引かれている部分があるが、本論文での引用に際して傍線は省略した。

⁵ 点線アンダーラインは筆者が強調の為に付したもので、原典には付されていない。本論文では、他の引用部分においても、鷗外訳と原文・現代訳が相違する部分に、適宜筆者が点線アンダーラインを引いた。

⁶ E.T.A. Hoffmann, *Das Fräulein von Scuderi*, in: ders. *Werke, ausgewählte Erzählungen*, Bd.I. Leipzig, Verlag des Bibliographischen Instituts. o.J. (刊行年無記)。本論文においては東京大学総合図書館鷗外文庫より取り寄せたコピーを使用した。

⁷ E.T.A.ホフマン(深田甫訳)「マドモワゼル・ドゥ・スキュデリ」(『ホフマン全集』第5巻 I [創土社、1990年]に所収)。

宝石が輝いた、という場面につながる。小箱を開けた時から、朝日が射し込むまで時間の経過があつたこと、つまり主人公が手紙を読んであれこれ考える時間があつたことを描くのが原作の作りであつて、これを鷗外訳のように、最初から朝日が射すように変更しては、時間の経過が伺えない。このことから考えると、鷗外が原作の構成を敢えて（即ち意図的・自覚的に）変更する合理的な理由はない、と言える。

とすると、鷗外が自覚的な形でない状態で変更を為した、との推測が一つの可能性として残る。その推測とは、鷗外が原文を、いわば独和対訳のように翻訳したのではなく、小箱を開けるシーンから手紙の場面、そして小箱に朝日が当たる叙述までのひとまとまりを通して、それを頭の中に入れ、その記憶に基づいて自らの訳文を構成し直したのではないか、というものである。そして、記憶の中で少々の混乱が生じ、原文の後ろの叙述を訳文の前に方に取り込んだ、ということが一つの推測として成り立つのではないか。

以下に、同様の例——即ち原文では後ろの方に書かれていることが、鷗外訳では前の方に先取りの形で訳されている例——を検討する。

物語のかなり後ろの方である。小箱の中の装飾品は、当代きっての飾職であるカルディヤック親方の作品であることが分かり、小箱をスキュデリに押し付けるように渡したのは、親方宅に住み込む徒弟の青年であったことも判明する。実はこの親方こそが連続宝石強盗殺人事件の真犯人である——自分が作った宝飾品に自己陶酔的な執着心を持つ親方は、宝飾品の買主からその品を自分の元に取り戻したい衝動を抑えきれず、ついには強盗殺人を犯してしまう——ということが物語の中盤から終盤で明らかになるが、そのことを当人以外には、まだ徒弟の青年しか知らない、という段階の場面である。親方は犯行に至る経緯等を、間わず語りに全て青年に打ち明ける。そして、犯行の為に夜間にどのようにして他人に気付かれぬよう家から外に出たか——親方は共同住宅に住んでいるから、普通に外に出たとすると、古い大きな玄関ドアを開ければならず、その際大きな音が響いて、他の住人に気付かれてしまう——を述懐するという場面がある。実は親方の部屋には、外の塀に直接通じる秘密の通路があり、そこを通って、石塀の一部の、これも秘密の回転仕掛けを利用して通りに出られる構造になっていると、親方が述べる。そこの鷗外訳は次のようになっている。

石垣の傍の鐵の棒を横へ引くと、石が勝手に廻る。これが丁度外の石の像に當る處だから、石に附いて廻つて外へ出ることが出来るが、常は石像の爲めに圍りの界が知れない。
(p. 137)

石造りの塀の外側には、塀の表面を装飾する為に幾つかの石像がしつらえてある。その内の一つが回転式になっていて、内側から外の道路側に出ることが出来る。鷗外訳では、このような石像の仕掛けの説明が詳しく為されている。親方は、この石像の回転扉を通って、共同住宅の誰にも気付かれないと、外に出ることが出来る、というわけである。こうした回転扉の叙述が、実は原文では鷗外訳と少し異なる。以下に当該部分の現代訳を示し、原文は脚注に示す⁸。

現代訳：するとたちまち、塀の一部が回転しあはじめ、その隙間からなら人間ひとりぐらいいはするりとくぐり抜けて、往来に出られるという細工になつてたのさね。 (p. 369)

一見すると、鷗外訳と変わりはないようだが、よく読むと原文には石像の説明がない。塀が回転することは分るが、それが塀を飾る石像の部分であることは、この段階では明かされていない。鷗外訳では、それがはっきり書かれているわけだが、それでは石像云々の叙述が鷗外の勝手気ままな創作的付加であるかというと、実はそうではない。原作では、上記の回転塀の説明の後しばらくは、親方の部屋に秘密の通路がある理由、そして親方がこの部屋に転入する前からこの秘密の仕掛けが存在した事情の説明が続き、最後にまた、この回転塀の仕掛けの説明に戻っている。そして原作では、この段階で初めて、石像の説明が出て来る⁹。

現代訳：あれは木の細工で、外側だけがモルタル仕上げで水漆喰かなんぞの塗料がかぶ

⁸ 原文 : ... und alsbald drehte sich ein Stück Mauer los, so daß ein Mensch bequem durch die Oeffnung schlüpfen und auf die Straße gelangen konnte. (S.142)

⁹ 原文 : Es ist ein Stück Holz, nur von außen gemörtelt und getüncht, in das von außenher eine Bildsäule, auch nur von Holz, doch ganz wie Stein eingefügt ist, welches sich mit sammt der Bildsäule auf verborgenen Angeln dreht. (S.142).

せてあるんだが、あれには、これもまた木製だが、石像そっくりに見える彫像が、外側から嵌めこんである。あの部分は、その彫像と一緒に、隠された蝶番で回転するようになっているのさ。 (p. 369)

鷗外は翻訳に際し、あらかじめこの部分まで目を通し、それを記憶に留めた上で、前の方の回転扉の説明の所に先取りして訳出したものとの推測が成り立つ。その際、問題の石像が実は木製であったとの原作の叙述が記憶から消え、単に回転仕掛けのからくりの説明の方に神経が集中したということも推測し得る。

3 先取り翻訳による結末露呈現象

原文の後ろの箇所で出て来る文言を、翻訳で先に出してしまうことによって、結末や成り行きが露呈する現象——俗に言う「ネタバレ」が生じている場合もある。

最初に紹介する例は、物語の発端部分、夜更けにスキュデリの館の戸口を激しく叩き、大声で扉を開けるように怒鳴る声がする場面である。この場面は、鷗外訳では次のようになっている。

戸を敲く音は段々劇しく成つて、それに時々男の聲で、早く此處を開けて下さい、後生だから(p. 103)

ここでは、謎の人物が男性であることが示されている。ところがこの箇所の現代訳を確認すると、「そのあいだにも、叩く音は相変わらず落雷のごとく響きつづけていたが、気がつくと、その合間にあいまに怒鳴る声が聞こえるようであった、『どうか開けてください、お願ひです、開けてください！』」(p. 280)となっていて¹⁰、物語の冒頭では声の主が男性なのか女性なのか、敢えてはつきりさせていないことが分かる。もちろん、そのすぐ後の文でこの声の主が男性であることが分かるのだが¹¹、鷗外の訳は、原文より早い段階で謎の人物の種明かしをしている。つまり原文では、まず「声」とのみ記し、その主が男性なのか女性なのか分からぬ描写で始まり、次いでその声の主が男性であることが分かるという、二段階の描写になって、読者が謎解きをしながら次の描写に進むような構造になっている。そこを、鷗外訳では初めから種明かしをしているわけである。

同様の例を挙げる。物語の中盤、宝石を携えた人物が愛人の元に通う、まさにその時に襲われるシーンである。襲われる直前、一人の男が何の警戒心もなく夜道を歩く場面が、鷗外訳では次のようになっている。

程なく小歌を謡ひ乍ら來たは、一人の士官と見えて、鎧の尖から下げる鳥の羽は薄明で善く見え、靴に附いて居る拍車の音は、澄み渡つて聞えました」(p.130)

鷗外訳では、この人物が「士官」であることが記されている。ところが、原文では、ここが單に ein Mann「一人の男」としか記されていない¹²。もちろん、この人物は兜を冠り、拍車のついた靴を履いていることから、軍人であることは容易に想像出来るが、少なくとも翻訳という観点からすると、鷗外訳は原文の当該箇所にない説明を施した訳になっている。実は原文では、後ろの方に、この人物が襲撃され、遺体のそばに ein Offizierhut「将校帽」が転がっていた、という表現があり¹³、鷗外はこの Offizier の部分を先んじて自己の訳文の中に取り入れていたことが推測し得る。

以上の二例は、原文の後ろの方に出て来る語彙を、鷗外が自己の訳文の前の方で先取りして活用した例であるが、それとは異なり、原文の後ろの方の特定の文章なり語彙なりを先

¹⁰ 原文 : Unterdessen donnerten die Schläge immer fort, und es war ihr, als rufe eine Stimme dazwischen: So macht doch nur auf um Christuswillen, so macht doch nur auf! (S.102)。

¹¹ 原文で die Stimme des Anpochenden (S.102)という表現が直後に出て来る。現代訳では「扉を叩いているものの声」(p.280)となっていて、男性であるかどうかは、訳でははつきりしないが、原文の des Anpochenden は der Anpochende という——動詞 anpochen の現在分詞形容詞の名詞化の——男性形 2 格であるから、この時点ではドイツ語文の読者は、声の主が男性であることが分かる。

¹² 原文 : Nicht lange dauert's, so kommt singend und trillerirend ein Mann daher mit leuchtendem Federbusch und klirrenden Sporen. (S.137) 現代訳 : それからほどなくして、ひとりの男が歌やトリンを口ずさみながら向こうからやってきます。羽飾りをぴかぴか光らせ、ブーツの拍車をがちゃがちゃいわせて歩いてくるのです(pp.356-357)。

¹³ 原文の S.138、現代訳の p.358 を参照。なおこの部分の鷗外訳は「士官の鎧」となっている(p.131)。

行して訳出したとは言えない例——即ち、原文の後ろの方で書かれていることの全体を、鷗外がかいつまんだ形で訳文の前の方で紹介した例——を挙げる。

その一つは、上に紹介した将校が襲われたのと同じ場面である。将校が襲撃されるのを目撃したのは、親方の元に住み込みで働いていた徒弟の青年である。青年は親方の娘と恋仲になり、それが親方に知れて破門されていたが、娘を恋しく思うあまり、夜に親方や娘の住む共同住宅のあたりをうろうろしていた。すると、住宅を囲む塀の一部が突然回転し、中から親方が出て来て、そのまま夜の道を歩き始めた。不審に思い青年が後をつけて行くと、夜道を歩いていた将校を親方が襲撃する場に遭遇する。鷗外訳では、目撃の様子を語る青年の述懐の中に次のような言葉がある。

主人は死に掛けた士官の上に俯伏して、何かして居る様で御坐りました。(pp.130-131)

原文では、親方(カルディヤック)が将校を襲撃して、なおも倒れた男の体に馬乗りになる、という描写がある¹⁴。鷗外は、更にそのあとで「何かして居る様で」という、原文にない描写を付け加えている。ここが問題である。

原文では、この襲撃直後の場面で、単に襲撃したことが記されているのみであり、それが遺恨の故なのか、それとも強盗の為なのか、書かれていらない。それは当然のことだ、この場面を目撃した青年は、まさか親方が連続宝石強盗殺人事件の真犯人であろうなどとは想像だにしていなかったのであり、そうである以上、読者もこの時点では、親方が何の為に将校を襲撃したのか分る筈もない。それが鷗外訳では「何かして居る様で」と、強盗を示唆するようないつまりは結論を先取りするような——描写を書き加えているわけである。

それでは、鷗外が原文の後ろの方にある特定の文章——死体から何かを取る等のしぐさを描写した文章——を先取りして前の方で訳出したのかというと、そうではない。原文で記されているのは、青年に目撃されたことに気付いた親方がその場を逃げ去り、直後に騎馬憲兵隊が現場に駆けつけて、これが例の殺人鬼による犯行であると推測する、という情景が記されてはいるが、親方が死体に何かの働きかけを為したとの叙述はない。読者は、騎馬憲兵隊が駆けつけて犯人を推測するという一連の流れから、親方こそが連続宝石強盗の単独犯であることを読み取れる——即ち親方が死体から宝石を奪い取るという行為に及んだと推測し得る——わけである。鷗外訳ではあたかも、後ろまで読んだ読者が、初めて読む別の読者に対して、思わず知らず種明かしを伝えてしまったかのように、親方の襲撃が、実は宝石強奪という行為を含んでいたことを示唆した訳文を為したのである。

もう一つ、やはり原文で後ろに出て来る特定の文章や語彙を先取りして訳したのでなく、後出の状況全体を概括的に把握した上で、訳者としてというより読者としての鷗外が、その状況に対する感慨めいたものを訳文の前の方で盛り込んだと目される例がある。

それは、物語の終盤である。上記の襲撃事件の後、親方は更に別の襲撃を行うが、その際返り討ちにあって瀕死の重傷を負う。今回もそれを目撃した徒弟は、瀕死の親方を肩に担いで共同住宅まで連れ帰る。親方はそのまま死を迎えるが、夜が明けると近隣の人々が親方の死に気付き、青年は親方殺しの犯人として誤認逮捕されてしまう。その後、世間の人々も裁判所も、状況証拠から徒弟の青年こそが真犯人であると固く信じるが、スキュデリのみが青年は無実であると確信し、裁判所(シャンブル・アルダント)の長官ラ・レニ(鷗外訳では「レニイ」)の元に談判に行く。その場面が、鷗外訳では次のようにになっている(以下の引用で「女學士」とはスキュデリ、「役頭」とはレニ長官を指す)。

勉めてレニイが鈍い、惰性の強い情感を動さうとしてあつた。是れは女學士がまだ彼の「シャンブル、アルダント」の役頭を善く知らなかつたのだ。(p.143)

裁判所の長官は、青年こそが真犯人であると頑なに信じてやまない。その頑迷ぶりを鷗外訳では「鈍い、惰性の強い情感」と表現していて、この部分も実は原文と少し違うのであるが、本論文のテーマからは外れるので、ここでは論じないとして、問題なのは、青年が真犯人であると信じる長官の考えを動かそうとするスキュデリについて「是れは女學士がまだ彼の「シャンブル、アルダント」の役頭を善く知らなかつたのだ」と記している点である。実はこれは原

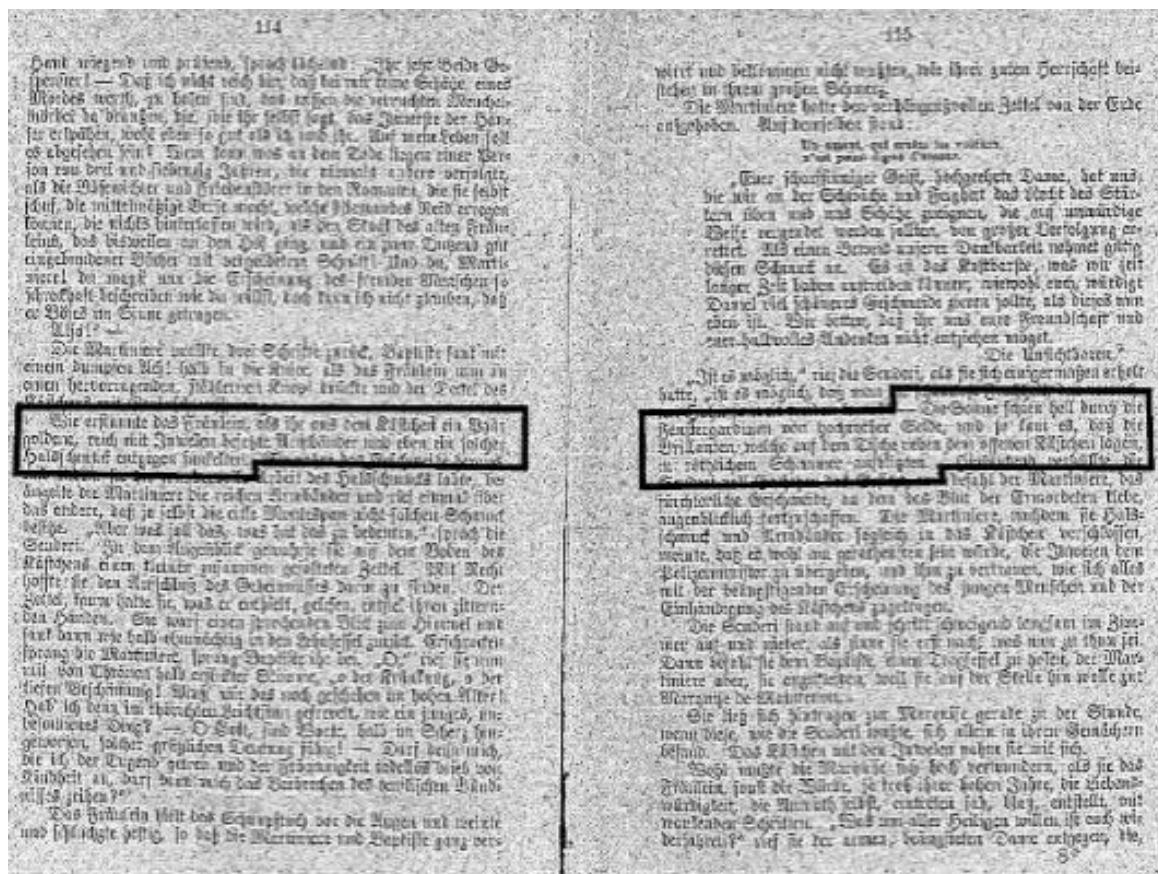
¹⁴ 原文 : Cardillac ist über den Mann, der zu Boden liegt, her. (S.137)、現代訳 : カルディヤックは、地面に横たわっている男の上に、なおも覆いかぶさるようにするのです(p.357)。

文はない、鷗外の創作的な付加である。鷗外の付加を読めば、読者は、スキュデリの働きかけが功を奏さなかったこと、そしてそれが長官の頑迷な人間性の故である、ということを感じ取るであろう。だが、原文では、スキュデリが長官に対し、非常なる熱意をもって説得に当たったとは書かれているが¹⁵、それが功を奏したかどうかについては——この段階では——書かれていない。原作のこの後の部分では、スキュデリの説得に対して長官が一つ一つ反論し、その際懲懲ではあるが、冷静かつ冷酷とも言える態度で青年を断罪する。鷗外訳においては、こうした原作の描写を、いわば「後の部分を読んだ読者の目で、前の部分にネタバレ的な感想を述べる」ような文章を訳文の中に盛り込んでしまったかのように思える。

4 「まとめ読み」の範囲

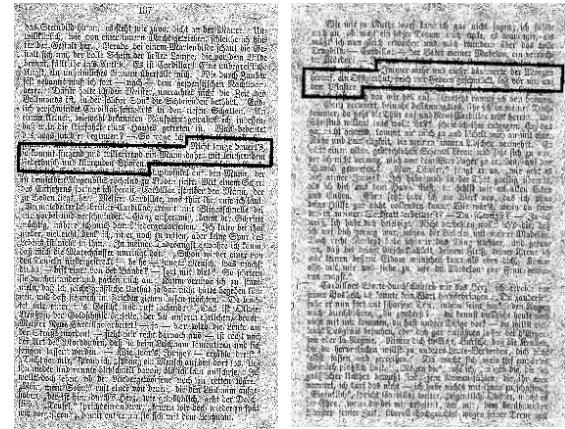
もし前節までに述べた仮定が正しいとすると、鷗外はどれくらいの分量を「まとめ読み」していたのか。

本論文第2節で取り上げた、朝日が宝石に当たるシーンの場合、仮に鷗外が原文を読んだ際に、最初に小箱を開ける部分から、次に朝日が射しこむシーンまでをまとめて読んだとすると、それは鷗外文庫所収の原文——つまり鷗外がまさに読んだもの——では、下図のようになる。図版の左ページ(原文 S.114)の囲った部分が最初に小箱を開けるシーン、右の囲った部分(原文 S.115)が宝石に朝日が射すシーンで、間に手紙をめぐる文章が記されている。小箱を開けるシーンから、次の朝日のシーンまで、原文では約1ページ分の間隔がある。相當に長い分量を一気に頭の中に入れたのか、あるいは本論文次節で述べるように、ドイツ留学中の読書の際の遠き記憶の中で、朝日が宝石に当たるシーンが鷗外の心に強い印象を残した可能性もある。



¹⁵ 原文 : Alles, was glühender Eifer, was geistvolle Beredsamkeit vermag, hatte die Scuderi aufgeboten, la Regnie's harten Herz zu erweichen. (S.147f.) 現代訳 : スキュデリとしては、ラ・レニの頑なな心を和らげるため、燃える熱意と才氣ある弁舌をかたむけて、できることをすべてぶちまけたのであつた (p.382)。
かたく

もう一つ、本論文第3節で検討した、襲われた人間が原文で最初は「男」としか書かれていない、後にそれが将校である（「将校帽」という表現を使用していた）という部分についても、同様に原文では約1ページの開きがある。右図の左側（原文 S.137）の囲った部分が、「一人の男」が登場する場面で、右側（原文 S.138）が、襲撃された後の描写で、死体のそばに「将校帽」が転がっていたという文章の部分である。ひょっとしたら、鷗外はこれだけの分量をまとめて概括的に把握し、それを記憶に留めた上で、記憶に基づいて原文の諸々の要素を訳文に再構成したのかも知れない。



5 鷗外の翻訳における短期的記憶と長期的記憶

鷗外訳の中に散見される「先取り翻訳」の基底にあるのは、通読に際する記憶力であるが、この場合の「記憶」には二種類あるように思われる。

一つは、翻訳の筆を執る時に原文を通読する、まさにその際の記憶である。現に机の前に原書を置いて、翻訳作業の為にドイツ語テキストを読み、頭の中に入れる。その場合の記憶は、「短期的記憶」と言える。

鷗外の翻訳流儀を検討する際、実はもう一つの記憶——「長期的記憶」と呼べるもの——についても考慮に入れねばならない。鷗外は、訳出作業に当たる際に初めてドイツ語文を読んだといったケースは希少で、それ以前のドイツ留学時代に、徒然の慰みにレクラム文庫等で手あたり次第に文学作品を読んでいて、そうした最初の読書の際の記憶も、帰国してからの訳出作業にある程度の影響を及ぼしたのではないかと目される。

時を隔てた二度の読書の実態を示すものとして、「玉を懷いて罪あり」とほぼ同時期に訳出を行った別の翻訳作品「悪因縁」において、実際に鷗外所蔵の原書への書き込み記録にそれが伺える。そのことについては、すでに別稿において論じたがあるので¹⁶、ここではその概略を述べるに留める。鷗外の旧蔵書のドイツ語原書の中には、ドイツ留学中に読書を行ったことを示す日付の記入及び簡単な感想（おもに漢文形式）と、実際に翻訳を行った時の初出誌の分割掲載の回数を示す数字の書き込みの二種の記入があり、このことから鷗外が留学中と帰国後の訳出作業の時の合計二回（あるいはそれ以上）、原書を読んだことが示されている。

「玉を懷いて罪あり」に関して言えば、原書への数字の書き込み（単に区切りを示す鍵括弧状の印のみの場合もある）が見られ、それらは初出である『讀賣新聞』に全十四回にわたって分割掲載された際の切れ目と一致する。また感想の書き込みと見られる（かなり判読困難な）文字の記入も見られる。但し、読書を行った日付の書き込みはないので、ドイツ留学中に原作 *Das Fräulein von Scuderi* を読んだという直接の証拠は、残念ながら得られない。

従って、あくまでも仮定の話になるが、鷗外が「悪因縁」の原作 *Die Verlobung in St. Domingo* の場合と同様、すでにドイツ留学中に *Das Fräulein von Scuderi* を読んでいたとすれば、その際の記憶も、実際に訳出作業を行う際に、何らかの影響を及ぼしたのではないかと思われる。たとえば——これも仮定の話にすぎないが——宝石箱に朝日が当たるシーンについて、鷗外がドイツ留学時に読書した際に、朝日に宝石が煌めくシーンが、いわば視覚的イメージのように記憶の片隅に残り、実際に訳出を行った際にその記憶がよみがえって、宝石箱を開ける最初のシーンに——原作ではここで朝日が宝石に当たる描写はないにも拘わらず——自己の訳文の前の方の部分に長期的記憶に基づいて書き込んでしまった、と考えることも可能ではないか。

¹⁶拙論「鷗外訳「悪因縁」と翻訳原本——訳者による削除と付加をめぐって」（大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 言語文化の比較と交流』第12号 2019年5月）を参考。

6 誤訳のメカニズム

およそ誤訳を為してしまう原因として、原文の難解な部分について、その語法や文法構造に理解が行き届かなかった場合や、あるいは作品の背景に対する知識が不足していた等の理由が考えられる。外国語初学者ならいざ知らず、プロの翻訳家が犯す誤訳は、要は「難しい所を間違える」ということに帰着する。

鷗外の場合は、そうではない。間違える筈のない、語学的に難解でも何でもないごく普通の箇所——時に初学者でさえ間違えないような箇所——に不可解なミスが見られるのである。

以下にその例を挙げて行くが、前節までに見た「先取り翻訳」の場合と同様、「玉を懷いて罪あり」に見られる誤訳は、記憶に基づいて訳文を構成するという鷗外独自の翻訳流儀に由来することが分かる。そしてそれらの多くは、短期的な記憶の際に生じた思わぬ単純ミスに由来するものであったと推測されるが、中には長期的な記憶が鷗外の錯誤の引き金となったと思われるものもある。

原作の冒頭で、謎の男が夜間にスキュデリ宅に押し入り、小箱を押し付けるように渡す、という場面があった。その翌日、小箱の中に豪華な宝石をあしらった装飾品を発見したスキュデリは、王の愛妃である侯爵夫人の所に相談に行く。装飾品を一目見ただけで侯爵夫人は、この作品が当代随一の名人であるカルディヤック親方の手によるものであると見抜く。それを受けてスキュデリが、早速親方と会いたいと申し述べる場面が続く。この箇所の鷗外訳は、次のようにになっている。（訳文の「マドレエヌ」はスキュデリのことを指す。）

マドレエヌは（……）今から往つてカルヂリヤツクに遭はうと云ふと、夫人は止めた。なに私も様子が知りたいから、飾職を此處へ呼びませう。又た指環のことだと思ふと來ませんから、逃へ物ではない、鑑定を頼むのだと、使に善く云つて遣りませう。（p. 111）この訳によれば、飾職の親方に会いたいとスキュデリが述べると、それを受け、こちらから会いに行くのではなくて親方を呼び寄せる、しかも装飾品製作の依頼ではなくて、宝石の鑑定を頼むという口実にするのがよいと、侯爵夫人がアイデアを述べる、ということになっている。

ところが原文では、宝石鑑定の依頼をするようにとのアイデアを出すのはスキュデリ自身であり、そのアイデアについて、侯爵夫人が賛成する、という内容になっている。

原文：Die Scuderi, (...) meinte, daß man dem Meister Sonderling ja gleich sagen lassen könne, wie man keine Arbeit, sondern nur sein Urtheil über Juwelen verlange. Das billigte die Marquise. (S.118)

現代訳：スキュデリは（……）それならすぐに使いのかたにいっていただき、あの変わりものの親方には、仕事のことではなく宝石の鑑定だけをお願いしたい、そう伝えるようにしていただいたら、と意見を述べた。侯爵夫人もその意見に同意した。（p. 314）

原文では、文章がはつきり二つに分かれ、最初の文章の主語は Scuderi であり、次の文章の主語は Marquise である。このことは、ドイツ語初学者であっても一目瞭然で、この両文章を一体のものとして理解することは、普通では考えられない。つまり鷗外訳は普通ではありえない、「不可解な誤訳」であると評される。

こうした不可解さの所以は、上に述べた推測、即ち鷗外が記憶に基づいて訳文を再構成した、という考え方からすると、あり得る混乱であったと思われる。つまり原文をかなりの速読でまとめ読みして、その後一気に訳文を作成した、という翻訳流儀に由来する混乱が見られたのではなかったか。

別の例でも、このようなまとめ読みが原因であると思われる誤訳（というより再構成ミス）が見られる。

上にも紹介したように、物語の冒頭で、謎の男が小箱を押し付けるようにして小間使いに渡す場面があるが、その翌朝になって、スキュデリ（下記鷗外訳では「女學士」）が小箱を開けようとすると、見ていた小間使いの女性と玄関番の男性が、怖がって二人とも後ろに下がる、という描写がある。

どれ、筐を。と開け掛けた女學士の平氣な様子に引き代へて、下女、下男は見えず三足程後へ下つた（p. 109）

だが、原文では——細かな違いだが——三歩下がるのは小間使いのみであり、玄関番は「あつ」と叫んで膝をつきそうになるという、別の行動を取っている¹⁷。つまり鷗外訳では、それが混同されている。

この物語において、小間使いも玄関番も、いわば脇役としての小さな位置づけしか有さぬ存在であり、驚いて三歩下がるのが一人であろうと、二人であろうと、物語の進行に関しては、殆ど何の影響もない。このような箇所で、鷗外が原文を斜め読みして、記憶が曖昧なままに翻訳の筆を進めたということは、想像し得る事柄であろう。

同様に、物語の進行に関して、大きな影響を与えた細かな所で、鷗外の翻訳が原作から外れている場合がある。それは、事件の調査を行っている裁判所長官の言葉の中にある。長官は、殺害された飾職のカルディヤック親方の行動を調査し、その過程で親方の住む共同住宅の他の住人を調べる。その中に、もう一人別の親方がいた。その人物に関する調査の具合を語る長官の言葉が、鷗外訳では次のように記されている。

カルデリヤツクの住つて居る家の大戸口の側に、クロオド、パトリュウといふ老人が夫婦暮して居ますが (p. 118)

ごく短い文章だが、ここで注意したいポイントは二つあり、第一はもう一人の親方（パトリュウ）が老人であって、夫婦で暮らしているということ、第二は妻の具体的な年齢が書かれていない、という点である。この部分の原作を確認すると次のようになっている¹⁸。

現代訳：さていちばん下の階には、ということは玄関のすぐわきにということになりますが、ここに住んでいるのが年寄りの親方クロード・パトリュで、手伝いの女中、といつても八十にはなろうかという年齢ですが、いまもって元気矍鑠びんびんしている女と暮らしているのです (pp. 334-335)

原文では、老人は夫婦で暮らしているのではなく、女中と暮らしていて、この女性が八十才近い年齢であると記されている。つまり二つのポイントにおいて、原作と鷗外訳は異なっている。

老人と八十才の女中を夫婦と訳したことが、誤訳なのか、意図的改変なのかは、判断に迷う所である。鷗外が記憶に基づく翻訳を為した、と主張する本論文においては、老人と女中との二人暮らしを、老夫婦ととらえた鷗外訳は、記憶違いによる誤訳であるという可能性をまず考えるべきであろう。しかし、実は鷗外訳には、本論文では紙幅の都合で論じていないが、明治の読者を意識して、原作の男女関係や女性の社会的役割について、意図的に改変したと思しき箇所も散見される。そのことから、「女中と暮らす老人」を「老夫婦」と訳した鷗外訳が、記憶違いに基づく誤訳ではなく、西洋文学原作の男女関係を、明治の読者の許容範囲を考慮して意図的に改変したという可能性も排除出来ない。

第二の点、即ち原作で女中が八十才を越えるとしている点については、鷗外訳の別の箇所に、老人の方を八十才であるとしている訳文がある。

パトリュウは最う八十に成つて居て、眠られぬ癖があるから、 (p. 118)

原文では、鷗外の上記の訳に相当する部分において（そしてそれ以外の部分でも）老人の具体的な年齢についての記載はなく¹⁹、鷗外が老人の年齢を八十才と訳したのは、老女中の年齢の八十才という原作の記載を、記憶の中で混乱させたまま、男性の方の年齢であると訳出してしまったものと考えられる。つまり、年齢の取り違えのミスは、普通に言う「誤訳」の次元とは異なり、記憶の混乱ないし錯誤の次元のミスである。

以上は、短期的な記憶の際に見られた混乱に由来する誤訳の例と目されるが、最後に紹介するのは、長期的な記憶が鷗外の中で一つの先入観となって生じたミスと思われる例である。

¹⁷ 原文：“Also” ——／ Die Martinier prallte drei Schritte zurück, Baptiste sank mit einem dumpfen Ach ! halb in die Kniee (sic!), (S.114)、現代訳：「それじゃ開けてみますよ！」／マルティニエールが三歩うしろに飛び退き、バプティストが「あっ！」と低く呻いて膝をつきそうになった (p. 304)。引用文中の Martinier (マルティニエール) は小間使いの女性、Baptiste (バプティスト) は玄関番の男性を指す。

¹⁸ 原文：Nun wohnt in dem untersten Stock, also dicht neben der Hausthüre, der alte Meister Claude Patru mit seiner Aufwärterin, einer Person von beinahe achtzig Jahren, aber noch munter und rührig. (S.128)。

¹⁹ 原文：Meister Claude leidet an Schlaflosigkeit, wie es alten Leuten wohl zu gehen pflegt. (S.128)、現代訳：クロード親方は、年取ったかたにはありがちなことですが、不眠症にかかってましてね (p. 335)。

鷗外訳の中に、スキュデリの元に、彼女の作品を求めて朝から次々に客が来訪する、という叙述がある。

スキュデリイ學士は既に其翌朝飾を持つて、カルディリヤツクの宅まで往かうと思つたが、生憎と詩歌を求めるものが多く、彼此とする内に、眞晝近くなり、(p. 114)

謎の小箱の中に入っていた装身具を、その作者であるカルディヤックに至急返却する必要に迫られたスキュデリが、いざ出かけようすると、来客が彼女の詩文を求めて殺到して来る、という叙述である。主人公スキュデリは、本論文冒頭で紹介したように、ルイ十四世の宮廷に出入りする詩人であり作家であった。従って、上の鷗外訳を見て読者は何の不思議も感じないであろうが、実は原文では、来客がスキュデリの詩文を求めて来るのではなく、客が自作の詩文を携えてスキュデリの元を訪ねる——つまり、高名な詩人に批評や校閲を求めに来る——ということになっている²⁰。鷗外はそれを逆に把握したことが分かる。

この例も、原文の主語を取り違える筈のない箇所であり、いわゆる誤訳というよりは記憶ミスに由来するものであり、かつ、短期的記憶の混乱の可能性の外に、長期的記憶による混乱の可能性もある。即ち、鷗外がこの作品を最初に読んだ時以来の「スキュデリは宮廷に出入りする高名な詩人・作家である」という記憶が一つの先入観となり、この先入観に従って鷗外は、主人公の元に詩文を求めて来客が殺到するという、原文とは逆の訳文を作成してしまったのではないか。

7 錯誤の連鎖とその解消

まとめ読みと記憶に基づく訳文作成という翻訳流儀に由来する誤訳も、前節の前半で検討した例のように、脇役的登場人物に関するものである場合は、よしや鷗外訳に原作との乖離が見られたとしても、物語の全体的展開を理解する際の支障とはなりにくい。従って読者は鷗外訳を読んで、何の違和感もなく先に読み進めることが出来る。

ところが、物語の主要人物に関する部分で、記憶ミスによる誤訳が存在した場合、読者は多少とも混乱を覚えることとなる。

スキュデリの物語の主要な登場人物に、オリヴィエなる青年がいる。この人物こそ、物語の冒頭において、スキュデリの館に押し入り、宝石の入った小箱を置き去った謎の男の正体であり、彼はまた、飾職のカルディヤック親方の元で住み込みの徒弟として修業を始めた人物である。この青年が、親方殺しの犯人と誤認され、かつまた連續宝石強盗殺人事件の犯人として捕縛されるという事件があり、彼の無実を信じるのは世間でスキュデリのみとなる。スキュデリは青年の無実を証する為に奔走し、囚われの身の青年と面会する機会を得るが、面会した青年の口から意外な事実を知らされる。即ち、青年の母は、かつてスキュデリの元に引き取られた少女で、この少女が成人した後結婚して生まれたのが自分であり、自分も幼い頃スキュデリにあやしてもらった、というのである。青年が母アンヌのことを語る部分の鷗外訳は、しかし読者に混乱を与える。

アンヌ、ギオーハと云婢は、小さい時からスキュデリイ家に仕へた女で、マドレエヌ女學士を吾子の様に膝の上に載せて育て上げたは渠だ。(p.125)

ここでいう「マドレエヌ女學士」とはスキュデリのことであり、「渠」(かれ)とはここでは「彼女」の意であるから、鷗外訳によればスキュデリを膝の上であやした女性は、スキュデリにとって母親に近い年齢ということになる。そしてこの女性の子供が例の青年なのであるから、鷗外の訳文のままに理解を進めると、スキュデリと青年は、同世代同士という年齢関係になる。ところが実際には、諸々の宝石強盗殺人事件が起こった時にスキュデリは高齢であり、一方オリヴィエは青年なのであるから、読者は鷗外の訳文を見て混乱しかねない。鷗外が訳した上記の部分に相当する原文及び現代訳は次のようになっている。

²⁰ 鷗外訳の「生憎と詩歌を求めるものが多く」に相当するのは、以下の箇所である。原文：Doch war es, als hätten alle schönen Geister von ganz Paris sich verabredet, gerade an dem Morgen das Fräulein mit Versen, Schauspielen, Anekdoten zu bestürmen. (S.123)、現代訳：パリじゅうの美的精神の持ち主たちがこぞって示し合せたのではないかとおもわれるほど大勢のひとが、なんと朝からはやくも、詩だの、戯曲だの、逸話だのを携え、ぞくぞくとマドモワゼルを訪ねてきたのであった (p. 323)。

原文 : Anne Guiot, die Tochter eines verarmten Bürgers, war von klein auf bei der Scuderi, die sie, wie die Mutter das liebe Kind, erzog mit aller Treue und Sorgfalt. (S.133)

現代訳 : アンヌ・ギュヨと言われてみれば、貧困にあえぐはめになったある市民の娘で、幼いころからスキュデリのもとに引き取られ、母親がわが子を愛するように、スキュデリが真心こめ念を入れて育てたそのひとであった。 (pp.347-348)

現代訳を見れば明らかのように、原文ではスキュデリがアンヌをわが子のように育てたのであって、アンヌがスキュデリを育てたのではない。

ドイツ語の文法を解説するならば、原文における Scuderi, die sie (...) erzog の部分の解釈が問題となる。文中の die は Scuderi を先行詞とする関係代名詞の女性形で、「～が」を表す形（1格）であり、一方 sie は Anne Guiot を受ける人称代名詞女性形で、「～を」を表す形（4格）である。純粋に外形からのみ言えば、die は 1格（～が）とも 4格（～を）とも取れ、同様に sie も 1格（～が）とも 4格（～を）とも取れる。もし die を 4格（～を）、sie を 1格（～が）と取れば、鷗外訳のようになる。外形上はどちらの解釈も可能であるから、鷗外の解釈も一応は成り立つ。しかし内容上、スキュデリにとって青年は孫のような年齢の存在であり、その母はスキュデリからすればわが娘くらいの年齢となる筈である。そのアンヌにスキュデリ自身が幼少の頃にあやされた、ということは現実ではあり得ない。従って、やはり die が主語 1格で sie が目的語 4格であると解釈するのが妥当となる。鷗外がそこを取り違えたということは、よほどの斜め読みをしたとしか考えられない。

鷗外の「誤訳」が、語学的な解釈ミスに由来するものというより、むしろ原作の登場人物の人間関係についての錯誤に基づくものである、という推測を裏付けるものがある。それは、人間関係の錯誤が、当該部分の後の訳文においても引き継がれている、という事実である。つまり、青年の母が幼少のスキュデリをわが子同然に愛したという錯誤が連鎖を為し、原文とは異なる人間関係がそのままに鷗外訳の中で続くことになる。言い換えれば、錯誤なりに整合性が取れた形の叙述になっているのである。たとえば、原文で上記引用文の直後に、スキュデリに育てられた「彼女」が成人して、求婚する男性が現れるという部分がある²¹。ここでの「彼女」は文脈から考えると当然アンヌになる筈の所、鷗外はその文脈自体を錯覚して把握しているから、これを、以下に示すように「女學士」（スキュデリ）と——錯誤なりに整合性を取って——訳文に反映せしめている。

女學士が大きく成了った時に、誠實な美少年のクロオド、ブルツソンといふものが、この婢を貰ひ受けて女房にした。クロオドは上手な時計屋で、巴里の町で評判も善く、収入もあることだから、スキュデリイ家でも喜んで結婚を賛成した (p.125)

本来なら、スキュデリが我が娘の如く愛したアンヌが成人し、そのアンヌに求婚する男性が現れ、その結婚にスキュデリが同意した、という話であるが、鷗外訳では、幼いスキュデリが成長した時、養母的なアンヌに求婚する男性が現れ、二人の結婚をスキュデリ家が（スキュデリ自身でなく）同意した、という風になっている。

さて、この錯誤はどこまで鷗外訳の中で続くのか。実は、鷗外訳のこれよりかなり進んだ所に、「兼て愛した召仕の一人息子」(p.143)と記されている。この箇所の原文は Den Sohn ihrer geliebten Anne (S.147)であり、現代訳では「自分が大事におもっていたアンヌの息子」(p.380)となっている。鷗外訳の「兼て愛した」は、普通に考えれば「召仕」に掛かり、つまりはアンヌをスキュデリが愛したという、錯誤が解消された訳文になっている。「兼て愛した」が

²¹ 原文 ; Als sie nun herangewachsen, fand sich ein hübscher sittiger Jüngling, Claude Brußon geheißen, ein, der um das Mädchen warb. Da er nun ein grundgeskickter Uhrmacher war, der sein reichliches Brod in Paris finden mußte, Anne ihn auch herzlich lieb gewonnen hatte, so trug die Scuderi gar kein Bedenken, in die Heirat ihrer Pflegetochter zu willigen. (S.133)、現代訳 : こうしてアンヌが年頃になったとき、眉目秀麗で礼儀作法も心得た若者が現われたのだが、その名はクロード・ブリュソン、この若者はやがて少女に求婚することになった。若者は叩き上げられた腕の立つ時計職人で、これならパリでも裕福に稼いでいけるはずの人物であったし、アンヌのほうでも心から好意をもつようになっていたこととて、スキュデリはなんのためらいもなく、養ってきた娘の結婚にすすんで同意したのであった (p.348)。

「一人息子」に掛かる、という考え方も出来なくはないが、原文では、「彼女（即ちスキュデリ）に愛された」はアンヌに掛かるとしか解釈出来ないので、翻訳の観点から考えると、鷗外訳における「兼て愛した」は「召仕」に掛かるものという普通の解釈が妥当であると考えられる。

どうして錯誤が解消されたのか。これは、初出の発行時期と関係がありそうである。錯誤が見られた箇所は、初出『讀賣新聞』では第7回掲載部分に存在する²²。一方、錯誤の解消が見られるのは第12回掲載号である²³。全集版を見ただけでは分からぬが、鷗外訳が分割掲載された初出紙を見ると、第7回では錯誤があり、かつそれが連鎖を為していたが、次にアンヌが登場する第12回では、原文を正しく訳していたことが分かる。

このことから更に、分割掲載に際しての鷗外の翻訳の実態も推測し得る。即ち鷗外は、「玉を懷いて罪あり」を『讀賣新聞』に分割掲載するに際し、掲載を行う都度一定の範囲を訳出するという手法を取ったと推測し得る。つまり鷗外は、全体の訳稿を完成させた上でそれを後に適宜分割して『讀賣新聞』の編集部門に回したのではないと思われる。

そしてその第7回（明治22年6月1日）の掲載分の訳文を作成する際に錯誤による翻訳ミスが生じたが、それから1ヶ月後に掲載された第12回（同7月3日）の部分を訳出する際には、以前の錯誤を引き継ぐことがなかった。

E.T.A.ホフマンのこの物語において、スキュデリと青年は非常に重要な位置を占める登場人物である。確かに青年の母は、この物語全体の中では重要な役割を果たしているわけではない。とはいっても、スキュデリとオリヴィエ青年という、物語の重要な登場人物二人をつなぐ役割を果たすという面では、読者の関心を一定程度惹きつけるような存在でもある。鷗外が、この人物についての原文の叙述をかなりの速読で把握し、その速読の過程において、思わぬミスが生じた可能性は高い。だがそれでも、スキュデリにとって孫ほどの年齢差の存在である青年に関し、少なくとも『讀賣新聞』第7回掲載分では、その母親にスキュデリが幼児の頃に育てられたという奇妙な錯覚のままに鷗外訳が構成されているのであり、読者はかなり混乱するのではないか。またこのような錯誤が、初出である『讀賣新聞』に始まり、再掲である『水沫集』所収の版（そしてこれが岩波版『鷗外全集』の底本となっている）にも引き継がれていることから、鷗外が自己の翻訳である「玉を懷いて罪あり」の訳文を、再掲にあたって再度通読することなく、ましてや原文と訳文を照らし合わせてチェックし直す等の作業も行っていなかったことが推測し得るのである。

8 小括

以上検討して来たように、鷗外の翻訳「玉を懷いて罪あり」は、逐語的に原文を把握してじっくりと翻訳作業を進めたというより、原文の数行ないし数十行をまとめて、かなりの速読で通読し、その内容の概略を大掴みに記憶に留め、その記憶に基づいて自己の訳文を、いわば再構成するという翻訳流儀に基づくものであったと推測される。その際、たまさか記憶の混乱が生じ、原文の後ろの方に書かれていた部分が鷗外訳で前の方に出て来る場合や、記憶ミスに基づくと見られる誤訳・錯誤が生じる場合があった。また鷗外における「記憶」には、翻訳作業の現場における短期的記憶の他に、ドイツ留学時における読書の際の遠き記憶、長期的記憶とも称し得るものとの二種があつたことも推測し得る。このような翻訳流儀は、鷗外の同時期の他の翻訳作品に比しても、特筆すべき特徴であると言える。

「玉を懷いて罪あり」に見られる鷗外の自由な翻訳ぶりは、単に意訳した、あるいは抄訳した、という次元のものではなく、鷗外自身のまとめ読みと記憶に基づく、独自の翻訳流儀の所産であったと評し得るであろう。

²² 念の為に、以下に初出の文章を掲げる。岩波全集版と大きな差はないが、初出には句読点がなく、また総ルビであり、若干字句の違いがある。「アン、ギオーといふ婢ハ小さい時からスキュデリ一家に仕へた女でマグダレーン女學士を吾子の様に膝の上へ載せて育て上げたのハ渠だ女學士が大きく成つた時に誠實な美少年のクロード、プラツソンといふものがこの婢を貰ひ受けて女房にしたクロードハ上手な時計屋で巴里の町で評判も善く收穫もあることだからスキュデリ一家でも喜んで結婚を賛成した」。（『讀賣新聞』附録、1889〔明治22〕年6月1日）。

²³ 初出「兼て愛した召仕ひの一人息子」。（『讀賣新聞』附録（1889〔明治22〕年7月3日）。

駐日大使ゾルフ②

——文人大使の交流——

中村綾乃

1はじめに

1928年3月1日付の『読売新聞』のコラムは、ドイツ大使ゾルフ（Wilhelm Solf）と元英國大使エリオット（Sir Charles Eliot）の交流を話題にしている。この記事では、ゾルフを「ドイツでも有名な世界言語學者で植民政策に關する學界の泰斗」、エリオットを「イギリス切つての梵語學者印度哲學のオーソリティ」と紹介し、「この二人の交誼こそ世にも美しい話」と書かれている。さらに「（外務次官の出淵勝次は）この二人の交際とその餘裕綽々たる研究振りを見て頻りに感慨に堪えぬものゝ如くであった」と付け加えられている。このコラムは「本國との電報往復で精一杯と云ふやうな日本の外交官などにはその爪の垢でも少し服ませたらヨカロ」という皮肉で締めくくられている¹。

ゾルフとエリオットは外交官のみならず、学者としての顔も持っていた。ゾルフはドイツの大学でサンスクリット語とインド哲学を修め、博士号を取得していた。一方のエリオットは言語学者としてアラビア語、トルコ語、中国語をはじめとする二十の言語を研究し、英語によるスワヒリ語教本やフィンランド語文法の解説書を執筆している²。この二人以外にも、1920年代の日本にはフィンランド代理公使ラムステット（Gustaf Ramstedt）やフランス大使クローデル（Paul Claudel）など、名の通った文人外交官がいた³。ラムステットはアルタイ語学者であり、エスペランティストとしても知られていた。クローデルは詩人大使という呼び名を持ち、詩人、劇作家として活躍していた。

二つの世界大戦に挟まれた戦間期、ゾルフは新生共和国最初の大使として来日した。先の大戦で戦火を交えた日本の政財界の要人、諸外国の外交官と交流し、ドイツの国際社会への復帰、各国間の関係改善をはかるとした。公私ともに親交を持った後藤新平から依頼を受けて、国交回復に向けた日ソ間の会談の仲介もしている。文人としての教養と知識、洞察力を活かし、柔軟な発想で相手国との関係を深めること、これが文人大使としての使命であった。

本稿ではゾルフの個人文書に依拠しながら、彼の駐日大使としての事績、特に外国公使や大使との交流に光をあてる。ゾルフの個人文書は、コブレンツのドイツ連邦文書館に所蔵されており、外交文書と個人書簡、日記などが含まれている。これまでに刊行されたゾルフの伝記、彼の事績に言及した研究はこの個人文書に依拠している⁴。

2 ポリシェヴィズム脅威論

（1）外務大臣と首相との会談

来日から約一ヶ月後の1920年9月6日、ゾルフはクニッピング（Hubert Knipping）宛ての書簡をしたためた。その書簡の中で、外務省への表敬訪問、外国の大使や公使の顔ぶれ、彼らとの交流を伝えている⁵。なおクニッピングは、1913年から1917年まで駐上海ド

¹ 『読売新聞』1928年3月1日（ヨミダス）。

² Cortazzi, Hugh (2004). *British Envoys in Japan, 1859-1972*, Kent: Global Oriental, pp. 114-122.

³ ラムステット、グスタフ・ヨン著／坂井玲子訳『フィンランド初代公使滞日見聞録』日本フィンランド協会、1987年；クローデル、ポール／樋口裕一訳『天皇国見聞記』新人物往来社、1989年；クローデル、ポール／奈良道子訳『孤独な帝国 日本の一九二〇年代』草思社、1999年；アルバム・クローデル編集委員会『詩人大使ポール・クローデルと日本』水声社、2018年。

⁴ von Vietsch, Eberhard (1961). *Wilhelm Solf, Botschafter zwischen den Zeiten*, Tübingen: Wunderlich; Hempenstall, Peter J / Mochida, Paula T. (2005). *The Lost Man-Wilhelm Solf in German History*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.

⁵ Solf an Knipping, Tokio den 6. September 1920, BArchK, N1053-115.

イツ総領事を務めた後、ベルンの公使館勤務を経て、外務省東アジア局長のポストに就いた人物である⁶。

この書簡の中で、ゾルフは「外交文書としてまとめるには、逐一論拠を挙げなければならぬ」と前置きし、矜持を持って述べている。

しかし私信であれば、足りない論拠については確信をもって、補うことができるでしょう。結局のところ、世界中を旅して回り、行く先々で人々と食卓を囲んできた私だからこそ、一か所に根を張る偏狭な俗物よりも、短い期間でより多くのことを見聞し、学ぶことができるのです⁷。

彼の言う「一か所に根を張る偏狭な俗物」とは日本に長く暮らし、保守的な傾向の強いドイツ人を指している。ドイツ革命時、ゾルフは左派から帝政期の役人と位置づけられ、反革命のレッテルを貼られたが、日本にいたドイツ人からは新生共和国の象徴であり、リベラルな大使と目され、反感を買ったこともあった⁸。

1920年8月9日、ゾルフは外務省を訪れ、外務大臣の内田康哉に信任状を提出した。信任状の提出に際し、ゾルフと内田の会談が実現した。この会談は、駐日スイス公使館の書記官ジニョー（John Gignoux）の仲介で行われ、彼も同席した。ジニョーによれば、内田とゾルフの会談は「外務大臣の旧友が休暇から戻り、挨拶に立ち寄った場に居合させたような」和やかな雰囲気で行われた。この会談で、ゾルフはドイツ革命に対する自らの立場と見解を明らかにしている。ゾルフは、ボリシェヴィズムを「バチルス（病原菌）」に例え、ボリシェヴィズムの影響がドイツ国内に広がることに警戒感を示した⁹。なお内田はロシア革命時、大使としてペトログラードに駐在していた。

内田との会談に言及した翌日、ゾルフは再び筆をとり、クニッピング宛ての書簡をしたためた。この書簡の中で、首相の原敬と会ったことを伝えている。原についての印象は「やや狡猾さを帶びているものの、堂々としていた」というものであった¹⁰。

ゾルフは自らの任務を、日独間の経済関係の強化と文化・学術交流の促進としており、日本との政治外交、軍事上の協力ないし連携は念頭に置いていなかった。日本の軍部と政界の中に、日英同盟に替わるドイツとの同盟を求める声があることを認識はしていたが、日本を政治的、軍事的なパートナーとは位置づけていなかった。首相の原と外務大臣の内田との会談でもそうであったが、日独間の政治的、軍事的な協力ないし連携に関する話題は避けていたのである。

（2）「政府なき国家の外交代表」

皇居での信任状捧呈式、外務省への信任状提出、表敬訪問といった一連の儀式を終え、ゾルフは一息つく間もなく、他の外国大使や公使を訪問した。そして、外国大使や公使の中に「政府なき国家の外交代表」がいることに驚く。

奇妙なことといえば、ロシアのような存在しない国家（つまりそれはロシア帝国のことを指しているのですが）が代表、しかも大使を派遣しているのです。そして何より驚くべきことは、この大使がドワイエンとして外国大使と公使を率いているのです。私としては、日本政府がこのような特例を認め、他の大使や公使がロシア帝国の大尉を自らのリーダーとして受け入れている限り、「波風を立てないこと（*quieta non move*re）に尽きる、それが最適解」と考えています¹¹。

⁶ Schmitt-Englert, Barbara (2012). *Deutsche in China 1920–1950—Alltagsleben und Veränderungen*, Gossenberg: Ostasien-Verlag, S. 75.

⁷ Solf an Knipping, Tokio 6 September 1920, BArchK, N1053-115.

⁸ 中村綾乃「駐日大使ゾルフ —上下逆さまのオペラグラスで舞台を観る」言語文化共同プロジェクト2023『言語文化の比較と交流』(11), pp. 29-31, 2024年。

⁹ Solf an Knipping, Tokio den 6. September 1920, BArchK, N1053-115.

¹⁰ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

¹¹ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

この「政府なき国家の外交代表」とは、クルペンスキー（Vasily Krupensky）を指している。彼はロシア革命が起こる前年、駐日ロシア大使に任命された。革命以降も日本がボリシェヴィキの新政権を承認していないことから、反革命派の白色政府の大使として駐在を続け、ドワイエンと呼ばれる外交使節団の長も務めていた。

なお駐日フィンランド代理公使のラムステットは外交使節団に加わる際、クルペンスキーから立場上、フィンランドの独立を認めることはできず、公式の招待状や書簡を送ることができないことを告げられた。そのためフィンランドの外交代表としてではなく、私人として関係を持たなければならなかつた。1920年8月、ポーランド代理公使としてタルゴフスキ（Józef Targowski）が来日する。タルゴフスキに対しても、クルペンスキーは私人として関係を持つことを告げている¹²。

クルペンスキーは帝政ロシア最後の駐日大使となる。というのも、1921年に入ると日本政府はクルペンスキーを正式な大使として認めない意向を示したのである。新政権の全権使節が来日するまでの間、書記官のアブリコソフ（Dmitriy Abrikosov）が代理大使となつた。なおドワイエンはクルペンスキーから英國大使のエリオットに引き継がれた。

（3）「ヤヌスの顔」

クルペンスキーについて、ゾルフは「愛嬌のある伊達男」と記しており、好印象を抱いた。そして、クルペンスキーと対照をなす危険人物として、ヨッフェ（Adolph Joffe）の名前を挙げている¹³。ドイツ革命時、外務長官だったゾルフはボリシェヴィキ革命への転化を阻止すべく行動した。エーベルト（Friedrich Ebert）率いる政府の閣僚にソ連のボリシェヴィキと癒着している者がいることを告発し、この告発がきっかけで外務長官を辞任したのである¹⁴。この時、ゾルフの告発を受けたのは独立社会民主党のハーゼ（Hugo Haase）とバルト（Emil Barth）であった。1918年12月9日、ゾルフはエーベルト宛ての書簡をしたためた。その中で「ソヴィエトの元駐ベルリン公使なる人物がボリシェヴィキのプロパガンダ誌を配布しており、さらには武器の調達まで目論んでいます」と書いている。ここで言及している元駐ベルリン公使がヨッフェであった¹⁵。

日本から書き送った書簡の中でも、ゾルフは折に触れて、ボリシェヴィズムの脅威を唱えていた。1920年9月7日付けのクニッピング宛て書簡の中で、ヨッフェの名前を挙げ、彼のような人物に対する警戒を促している。

ドイツ外務省に念を押しておいていただきたいのです。ベルリンにはヨッフェのような人物が潜んでいることを。あの時の脅威は過去の出来事として過ぎ去ったものではなく、今なお続いているのです。どうかそのことを忘れないで下さい¹⁶。

さらにゾルフは、ボリシェヴィズムを古代ローマ神話の「ヤヌスの顔」に例えている。

ボリシェヴィズムにはヤヌスのような二つの顔があるのです。私はその西側の顔をドイツで目にしました。そして今、私は東側の顔を見ているのですが、それもまた不気味な笑みを浮かべたグロテスクな顔なのです！¹⁷

クルペンスキーが日本を去った後、1923年1月、後藤新平の招きで来日したのがヨッフェであった。ゾルフは、後藤とヨッフェの会談の仲介役を担い、彼の言うところの「ヤヌスの東側の顔」と対峙することになる。

¹² ラムステット、グスタフ・ヨン著／坂井玲子訳『フィンランド初代公使滞日見聞録』日本フィンランド協会、pp. 54-58、1987年。

¹³ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

¹⁴ Solf an Ebert, Berlin den 9. Dezember 1918, BArchK, N1053-60.

¹⁵ 中村綾乃「ドイツ革命とゾルフー帝国の終焉から新生共和国へー」言語文化共同研究プロジェクト2020 『言語文化の比較と交流』(8)、p. 29、2021年。

¹⁶ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

¹⁷ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

ゾルフはこの書簡の中でボリシェヴィズム脅威論を唱え、警戒を促した後、イタリア公使のパウルッチ・ディ・カルボーリ（Raniero Paulucci di Calboli）とフランス公使のバプスト（Edmond Bapst）に言及している。いずれの公使も礼儀正しく心遣いがあるとし、好感を持った。ただし、パウルッチ・ディ・カルボーリについて「彼はボリシェヴィズムにさほどの脅威を抱いておらず、政権が三年も続いているのだから、それほど悪いものではないくらいに考えているようだ」と記している。さらにゾルフは「嘆かわしいことに、ポチヨムキンの子孫たちがボリシェヴィキになり、祖先のお家芸を継承している」と風刺を込めて付け加えている¹⁸。

3 新生国家の公使

ボリシェヴィズム脅威論を唱えた同じ書簡で、「ここでリフレッシュのためのカクテルの登場です」という口上を切り、チェコスロヴァキア公使のペルグレル（Karel Pergler）を紹介している¹⁹。ペルグレルの前任者はニエメツ（Václav Němec）である。第一次世界大戦時、ニエメツはオーストリア・ハンガリー軍に招集され捕虜になった。その後、ロシアでの抵抗運動に加わり、チェコ軍団を率いるようになり、駐日チェコスロヴァキア外交代表に任命された。チェコスロヴァキアが独立し、日本との外交関係が成立した後、ペルグレルが駐日公使として来日し、初代駐日公使となつた²⁰。

ゾルフの文面からは、ペルグレルとの初対面での衝撃、外交現場に現れた新生国家の公使への期待が伝わってくる。

ペルグレルはたどたどしいドイツ語で私に話し掛けた後、できれば英語で話したいと言断ったのです。そしてここからが衝撃の展開でした。ボヘミア生まれの男が生粋のヤンキーに変貌を遂げたのです。彼は本場のカウボーイにも引けを取らない訛りのアメリカ英語で話し始めました。何とも興味深い人物です。ドイツ人とチェコ人の両者の要望についても理解を示し、的を射た考えを持っていました²¹。

ゾルフが来日する約半年前、1920年2月、ペルグレルは初代チェコスロヴァキア公使として来日した。日本到着の際、新聞取材に応じ、自らの生い立ちを語っている。

本國を出てから久しいので状況は能く知らぬ、僕はボヘミヤの生れで、幼少の時に米國に亘り、其後プラツグに歸って政治的教育と新聞記者としての訓練を経爾後は操舵界に身を投じて居たが戦争の勃發と共に米國で新聞に雑誌に又は小冊子で故國の獨立を唱道し戦争に力を盡したが其の甲斐あって故國は今回漸く獨立しマサリツク博士は直ちに歸國して新興國の創設に從事している、そして自分は米國に留まりチエツク・スロバツク國を代表して各方面諸種の事務に鞅掌して居たが今回日本駐箚公使に任命されたのである²²

ペルグレルは米国大統領補佐官のハウス（Edward M. House）と面識があり、自他ともに認める知米家であった。ゾルフはペルグレルから得られる米国情勢の情報に期待していたが、彼の駐日公使としての任期は1年に満たなかった。外務大臣のベネシュ（Edvard Beneš）と対立し、ペルグレルは駐日公使の職を解かれ、外務省を追われることになった。その後ペルグレルは米国に移住し、ゾルフとの交流は途切れた²³。

1921年8月、ペルグレルの後任として、フヴァルコフスキ（František Chvalkovský）が来日する。フヴァルコフスキは社交家として知られていた。日本にいた1921年から1923年までの間、フヴァルコフスキはゾルフとフランス大使クローデルの間を行き来してい

¹⁸ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

¹⁹ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

²⁰ 長與進『チェコスロヴァキア軍團と日本 1918-1920』教育評論社、pp. 154-156、2022年。

²¹ Solf an Knipping, Tokio 7 den. September 1920, BArchK, N1053-115.

²² 『読売新聞』1920年2月13日（ヨミダス）。

²³ 長與進『チェコスロヴァキア軍團と日本 1918-1920』教育評論社、pp. 154-156、2022年。

た。後述するように、ゾルフとクローデルは競合関係にあり、牽制し合う状態が続いていたが、フヴァルコフスキイを介して互いの立場や思惑を探り合うことがあった²⁴。

フヴァルコフスキイは駐日公使としての任務を終えた後、駐米公使、駐イタリア公使を経てプラハに戻り、外務大臣となる。ミュンヘン協定成立の翌年、1939年3月、ヴァルコフスキイは、大統領ハーハ（Emil Hácha）とともにベルリンに赴き、ボヘミアとモラビアを「総統の手に委ねる」とするプロトコルに署名した。

4 中国人との政治対談

1920年9月9日、ゾルフは再び筆をとり、クニッピング宛ての書簡をしたためた。この書簡では、中華民国代理公使の莊景珂との会談について伝えている。ゾルフは日本人通訳を手配して、この通訳を介して莊との会談に臨んだ。初対面の莊の印象は「謙虚で知的な好青年」というものであり、次のように付け加えている。

彼はまるで「自分はかくも著名な政治家と向かい合うには身分不相応であり、末席を汚しているにすぎない」と考えているかのようだった²⁵。

この最初の会談において、莊は口数が少なく、社交辞令程度の挨拶を交わしただけであった。別れ際に莊の方から、英語を話す中国人通訳を同伴し、別の日に会談の機会を持ちたいという申し入れがあった。最初の会談において、莊は日本人通訳の手前、あえて政治的な問題には触れなかつたのである。

中国人通訳を介し、英語で行われた二回目の会談では莊が口火を切った。莊はドイツとの関係回復への期待を込め、中華民国公使をベルリンに派遣したいと伝えた。ゾルフは「ドイツ政府も速やかな関係回復と公使の交換を望んでいる」と返答し、北京に派遣する公使の人選についても付け加えた。ベルリンと北京間の公使交換について、ドイツ側の意向を確認すると、莊は間を置かずに本題である山東問題に言及した。最初の会談では日本人通訳の存在を意識し、この話題を出すことを控えたのである。まず莊は、山東省の旧ドイツ権益、いわゆる山東問題についてゾルフ個人の見解を問うた。ゾルフは「本来であればドイツと中国の当事国間の協議によって解決を図るのが妥当なプロセスである。しかしヴェルサイユ条約によって阻まれており、ドイツは同条約を厳格に遵守しなければならない立場にあるため、山東問題には関与できない」と述べ、中国と日本の二国間の協議に委ねるべきという見解を述べた²⁶。

中国国内では国際連盟に訴えるべきという意見が大勢であり、政府もその方針を固めていた。しかし莊個人としては、日本政府と交渉のテーブルに着くことが最善の解決策と考えていた。ただし、莊がその解決策を表立って主張することはできなかったのである。中国国内において、彼は「親日派」として位置づけられ、度重なる批判に晒されていたからである。ゾルフは「国際連盟の基本理念に反して、各国が二国間・多国間の同盟を結ぶ状況下で、中国人は本当に国際連盟に期待しているのか」という質問を投げ掛けた。この質問に対して、莊は「政治家の多くは国際連盟に期待はしていないが、世論の圧力があまりにも大きいために、中国政府としては国際連盟に訴える他ない」と答え、次のように付け加えた。

もし家族の誰かが病気になって、皆が名指しでこの医者を呼ぶようにと強く訴えたら、家長としてはその要求を受け入れざるを得ないので。たとえその病人が命を落とすことになったとしても²⁷。

²⁴ クローデル、ポール／奈良道子訳『孤独な帝国 日本の一九二〇年代』草思社、pp. 48-49、1999年。

²⁵ Solf an Knipping, Tokio den 9. September 1920, BArchK, N1053-115.

²⁶ Solf an Knipping, Tokio den 9. September 1920.

²⁷ Solf an Knipping, Tokio den 9. September 1920.

ゾルフはこの莊との会談を通じて、日本人と中国人とでは、政治対談や交渉のスタイルが異なることに気づく。彼によれば、日本人は直ちに核心的な議題に入ることはせず、前置きに長い時間をかけ、慎重に言葉を選びながら議論を展開する傾向があった。ゾルフはこの対話スタイルを「アーティチョークの葉を一枚ずつ歯で引き剥がして食べているよう」と表現している。対照的に、中国人的な莊は前置きを早々に切り上げ、直ちに山東問題という本題に切り込もうとした。また莊は、本題に入るまでの間、はやる気持ちを抑えようとはせず、表情や仕草から感情が露わになることがあった。莊との対談について詳述したこの書簡は、次のように締めくくられている。

この中国人について、私の目線から見たままを述べました。「原点 (*terminus ex quo*)」という目線からです。なぜなら、私にとって外交使節団のメンバーとの政治対談はこれが初めてだったからです。しかし他方で「到達点 (*terminus ad quem*)」という目線も含まれています。というのも、あなたは中国人のことを、当事者のような目線で理解しておられるでしようから²⁸。

ゾルフの関心は山東問題ではなく、日本人と中国人の外交儀礼、政治文化の違いに向けられていた。ただし政治対談や交渉において、日本人は徐々に話題の核心に迫るのに対して、中国人は直ちに核心に切り込み、單刀直入に主張や質問を提示するという指摘は、中国駐在歴を持つクニッピングにしてみれば既視感を覚えるものだったかもしれない。

5 旧友との再会

エリオットとゾルフが初めて出会ったのは 1899 年。場所は南太平洋のサモア諸島の西部、ウポル島であった。サモアには村落の集合体からなる首長国があり、首長同士の覇権争いが絶えなかった。1898 年から 1899 年にかけて、首長位の継承をめぐる争いが起き、この抗争に独、米、英の三国がそれぞれの利害をもって介入し、三国の植民地争奪戦となつた。米国、英國との交渉役として、ドイツからサモアへ派遣されたのがゾルフであった。1899 年 5 月、ゾルフはアピアの外国人評議会の会長に就任し、三国の利害調整をはかつた。外国人評議会には、ドイツ代表委員にシュテレンブルク (Speck von Sternburg)、米国代表委員にトリップ (Bartlett Tripp)、そして英國代表委員に選出されたのがエリオットだった。結局、英國はサモアから撤退するかわりに、トンガおよびソロモン諸島の領有を宣言したため、米独間でサモアの分割が決められる²⁹。

このサモア分割の前夜、1899 年 7 月 29 日、エリオットはゾルフに書簡を送っている。この書簡で、エリオットは政府会議の召集をめぐって意見対立はあるものの、ゾルフとの友情は揺るがないことを強調している。

これまであなたとは友好的な雰囲気のもと、対話を重ねてきました。ですからあなたが外国人評議会のトップにふさわしくないなどと微塵も考えておりません。そのことを改めてお伝えする必要はないでしょう。私はこれまでの評議会で、あなたが裁判所のトップに向いていないというようなことは一切言ったことがありません。あなたには十分な資質があり、適任であることは疑いようありません³⁰。

この書簡は「私にとって、あなたと出会えたことはサモアでの特別な思い出となるでしょう」という言葉で締めくくられている。外国人評議会において、エリオットはドイツ代表委員のシュテレンブルクとそりが合わず、しばしば対立していた。この時、二人の仲裁役を買って出ていたのがゾルフだったのである。

²⁸ Solf an Knipping, Tokio den 9. September 1920, BArchK, N1053-115.

²⁹ 中村綾乃「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層—混合婚をめぐる議論を起点として」工藤章・田嶋信雄編『ドイツと東アジア 一八九〇—一九四五』東京大学出版会、pp. 262-263、2017 年；飯田洋介「皇帝と大統領のあいだで—外交官シュテレンブルクとドイツの世界政策」桑名映子編『文化外交の世界』山川出版社、pp. 65-89、2023 年。

³⁰ Eliot to Solf, Apia July 19. 1899, BArchK, N1053-115.

サモアでの植民地分割交渉のテーブルから二十年、ゾルフとエリオットはともに駐日大使となり再会を果たした。エリオットとの再会について、ゾルフは「幸先がいい」と記している。

エリオットは私のことを温かく迎え入れ、開口一番、サモア時代の思い出話に花を咲かせ、二十年ぶりに会えたことを喜んでいました。彼は私をお茶に招き、とりとめのない話をしましたが、時事問題やニュースになっている話題には一切触れませんでした。彼についてですが、噂されているように反独的なのか、あるいは親独的なのか、それとも無関心なのかを探ろうとさりげなく話題を振ってみましたが、巧みにかわされてしまいました³¹。

ゾルフとエリオットが駐日大使に任命された背景には日英同盟があった。この同盟は中国大陸における日本と英国の権益を相互承認、擁護するものであったが、仮想敵国だったロシアは崩壊し、その存在意義は失われていた。またカナダを筆頭とする英國連邦の構成国が同盟に反対していた。日本と英國の双方から、同盟に反対する声が上がり、日本の軍関係者のなかから英國との同盟関係の解消とともに、ドイツへ接近をはかり、ドイツを介してソ連と連携しようとする動きがあったのである³²。

エリオットは日本との関係を重視し、日英同盟の存続を唱えていたが、本国政府は米国との関係を優先し、同盟関係に終止符が打たれた。またワシントン会議で採択されたワシントン海軍軍縮条約で日本の海軍力は制限され、日英関係は冷却化した。はからずもエリオットは日英同盟の終焉を見送る役となり、一方のゾルフは日英同盟に替わる日独ソの連携構想の主軸と目されたのである。

日英同盟なき後、エリオットは米国との協調体制の強化をはかる本国政府の政策に反対し、1925年をもって駐日大使の職を解かれ、翌1926年2月、外務省を去った。エリオットが務めていたドワイエンは、ゾルフが引き継ぐことになった。クニッピング宛ての書簡の中で、ゾルフはエリオットの解職に触れているが、その文面からも戸惑いの感情が読み取れる。

サー・チャールズ・エリオットの突然の召還について、一体どのような事情があるのか調べていただけないでしょうか。私としては、彼の辞任が残念でなりません。彼はサモア時代からずっと変わらぬ友情を寄せてくださいました³³。

エリオットの後任となったティリー（John Tilley）について、ゾルフは「有能な官僚であり、真面目で働き者」と評価しながらも、「政治的には小物」であり「会話は極めて退屈」と不満を述べている³⁴。

1926年4月22日付の『ジャパン・タイムズ&メール』The Japan Times & Mail には、ドイツ大使館で行われたアジア協会の会合で、ゾルフが行った演説が掲載されている。演説の冒頭、ゾルフはエリオットの卓越した才能と教養に敬意を表し、彼との対話に刺激を受けて、仏教に関する研究論文を執筆したことを明かした。そしてゾルフは、アジアの宗教や文化に対する欧米諸国の人々の無知と無理解を批判し、彼らが仏教に関する知識を少しでも得て理解を深めることで、誤解がなくなり、国際情勢の緊張を和らげることができると述べた³⁵。

エリオットとゾルフの交流は、エリオットが外交官の身分を失った後も続いた。学者としての本分に戻ったエリオットは帰国せず、日本で余生を過ごすことを決めた。彼は奈良

³¹ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

³² 中村綾乃「駐日大使ゾルフ 一上下逆さまのオペラグラスで舞台を観る」言語文化共同プロジェクト2023『言語文化の比較と交流』(11)、pp. 27-28、2024年。

³³ Solf an Knipping, Tokio den 16. Oktober 1925. BArchK, N1053-115.

³⁴ Solf an Knipping, Tokio den 23. Januar 1928, BArchK, N1053-115.

³⁵ The Japan Times & Mail, Thursday, April. 22, 1926, The Japan Times Archives.

のホテルに滞在し、仏教經典の研究に専念した。来京の際には、ゾルフの来賓としてドイツ大使公邸に滞在し、旧交を温めた。

6 日本の独仏戦

1921年5月25日付の『読売新聞』の紙面には「佛蘭西文化の爲め 外交官の錚々連が交つて學界に挑戦 獨逸系統が日本文化の中心を爲すとは國辱だとて」という見出しが躍る。同記事によれば、日本の学界は帝国主義と軍国主義に根ざしたドイツ文化が主流であり、フランス文化が蔑ろにされていた。駐仏大使に再任された石井菊次郎は、日仏間の文化交流とフランス文化の普及を進めていた。フランス同好会は雑誌『フランス文化』の刊行、講演会の開催、またフランス留学のための奨学金制度の拡充をはかった。この同好会はドイツ文化の独壇場である「學會に挑戦」というスローガンを掲げ、駐日大使の任を受けたクローデルに希望を託した³⁶。

クローデルは外交官である傍ら、劇作家、詩人としても活躍しており、フランス文壇の重鎮だった。なおクローデルの前任者であるバプストは公使であった。フランスの外交使節が公使から大使に格上げとなり、最初に大使に任命されたのがクローデルであった。

クニッピングとクローデルは旧知の間柄であった。クニッピングはゾルフ宛ての書簡の中で、クローデルの作品の批評に触れた後、彼の政治的立場について伝えている。

戦前のドイツでは、クローデルの作品は絶大な人気を誇っていました。批評では、フランス的な精神とドイツの知的特性をつなぐ架け橋として称賛され、そうした調和の方向性において、彼への期待も大きかったのでしょう。政治的な立場はといえば、彼は自他ともに認めるフランス愛国者であり、帝国主義的な傾向があるのも確かです。ですから、今のところは我がドイツの敵対者といえるでしょう。その意味では、あなたが彼に好感を抱くということは考えにくいでしょう³⁷。

なおクニッピングは、クローデルを説得する際の切口として「彼のプライドに訴えかける」という助言を付け加えている。

1923年1月11日、ドイツの賠償金の遅延に対する報復措置として、フランスとベルギーがルール地方を占領した。このルール占領の報を受け、ゾルフは『朝日新聞』の紙面で「日本国民に告げる」と呼び掛け「暫く思ひを潜めて事の真相を知悉し給へ、諒ることなくその推移を追うて判断されたい」と訴えた³⁸。

さらに同年1月17日付の『朝日新聞』には、「日本の獨佛戦」という見出しの記事があり、次のように書かれている。

詩人大使クローデルを日本に派遣した佛蘭西は日佛美術交換や或は日本の文士に勳章を興へたり機關雑誌を出したりして、所謂佛蘭西文化の宣傳に大努力とある、陸軍、官海、醫學、法學の各方面に從來根をはつてゐた獨逸文化に向つて戰ひは眞最中だ。ルール地方侵入の精神は日本では文化戦争となつて現れてゐる³⁹。

1926年4月30日、ゾルフは駐仏ドイツ大使ヘッシュ (Leopold von Hoesch) 宛ての書簡をしたためた。この書簡の中で、ゾルフはクローデルの戯曲作品『聖女ジュヌヴィエーヴ』について、「とりとめがなく、支離滅裂な詩的作品」、「粗野で品位を欠いた表現」、「悪趣味」という言葉を並べ立てて酷評している。ゾルフは自らこの作品の批評を書き、その批評を日本語に訳して、日本の新聞社に持ち込んだ。新聞への掲載に際して、

³⁶ 『読売新聞』1921年5月25日（ヨミダス）。

³⁷ Knipping an Solf, Berlin den 22. Januar 1921, BArchK, N1053-115.

³⁸ 『朝日新聞』1923年（大正12年）1月15日「朝日新聞記事クロスサーチ」。

³⁹ 『朝日新聞』1923年（大正12年）1月17日「朝日新聞記事クロスサーチ」。

本名を伏せ日本人の名前を使い、日本の教養人がこの作品を批判しているように装ったのである⁴⁰。

この書簡の中で、クローデルを「官僚ないし外交官としての基準で評価することはできない」と前置きした上で、次のように記している。

クローデルは独自の存在です。彼の半分は農民、半分は都会人です。そして4分の1は体制の旗振り役、4分の3は詩人、さらに150%のカトリック信者です！⁴¹

1923年10月25日、クローデルのレジェ（Alexis Léger）宛ての私的書簡の中には、「（日本は）ロビンソン・クルーソーと化している」と書かれている。クローデルは、日英同盟の終焉により英米間の結束が強まり、アングロサクソンの軸から日本が外され孤立を深めていることを指摘している。そして、この日本外交の孤立に日仏接近の可能性を見出そうとしていたのである⁴²。

一方のゾルフは、クローデルの使命であった日本におけるフランス文化の普及、日本との関係強化は「期待外れに終わった」と伝えている。

日本人の間でフランス文化の普及をはかること、アングロサクソン、ドイツ文化の影響の拡大を妨げること、いずれも上手くいきませんでした。そう認めざるをえないでしょう。日仏友好が強調される時というのは、フランスを英国や米国との対抗勢力としたい、そうなればいいと望む時、あるいは孤立感を味わいたい時だけです！事あるごとに私は注意喚起をしてきました。パリと東京の間に緊密な友好関係が出来上がっているというのは噂に過ぎません。そんな噂を鵜呑みにしないようにと⁴³。

エリオットとゾルフの間には、文学的素養や文化的関心による結びつき、外交という枠を超えた対話の場があった。しかし対照的に、クローデルとゾルフの関係は国家間の競合、利害と対立が如実に投影されたものとなった。

7 終わりに

1928年12月、ゾルフは駐日大使としての任務を終え、帰国の途についた。駐日大使が外交官としてのキャリアの最後を飾るものとなる。帰国後、ゾルフは自ら新しい政党を立ち上げようとしたが、中央党の支持基盤であるカトリック勢力や社会民主党の左派との提携を拒み、挫折してしまう。またゾルフは、リットン調査団のドイツ代表委員の候補にも名前が挙がったが、親日的な傾向があるとして候補から外された。ゾルフ自身は日本の大蔵政策、さらには東アジア全体の問題に対して、ドイツを含む欧米諸国は不介入と不干渉の立場を貫くべきであると主張し、リットン調査団を批判していた⁴⁴。

ヒトラーの権力掌握後、ゾルフは体制批判を憚らなかった。宣伝相ゲッベルス（Joseph Goebbels）と面会し、ユダヤ人問題について意見を申し入れたこともあった。1933年5月14日付のゲッベルスの日記には、以下の記述が見られる。

昨日：四六時中の会議（中略）ゾルフ閣下に会う。彼は私にユダヤ人問題に関する忠告をしてきた。このこと以外において、彼はきわめて好印象⁴⁵。

⁴⁰ Solf an von Hoesch, den 30. April 1926, BArchK, N1053-75.

⁴¹ Solf an von Hoesch, den 30. April 1926, BArchK, N1053-75.

⁴² クローデル、ポール／奈良道子訳『孤独な帝国 日本の一九二〇年代』草思社、p. 183、1999年。

⁴³ Solf an von Hoesch, den 30. April 1926, BArchK, N1053-75.

⁴⁴ 中村綾乃「駐日大使ゾルフ 一上下逆さまのオペラグラスで舞台を観る」言語文化共同プロジェクト2023『言語文化の比較と交流』(11)、pp. 33-34、2024年。

⁴⁵ Goebbels, Joseph, Fröhlich, Elke (Hg.). (1987). *Die Tagebücher von Joseph Goebbels: Sämtliche Fragmente*, Munich, New York, London, Paris: K. G. Saur, S. 420.

1933年当時、ゾルフはドイツで活動の場を奪われた「ユダヤ人」の亡命支援や日本での就職先の斡旋をしていた。1936年2月、ゾルフは病死するが、妻のヨハンナ（Johanna Soif）と長女のラギ（Lagi von Ballestrem）が意思を継いだ。ラギは1933年から1938年まで、上海でユダヤ人難民や亡命者の援助を行った。帰国後、母親のヨハンナとともに「ゾルフ・サークル」を組織し、反体制運動に身を投じた⁴⁶。

駐日大使として8年間、ゾルフは日本の政治家のみならず、フランスと英国、ロシア、中華民国、大戦後に独立した新生国家の大使や公使と交流した。文人大使として、文化と政治を橋渡しする立場で積み重ねた交流の経験は、ゾルフの政治的立場と政策志向にどのように結び付いていったのか、稿を改めて彼の政治構想、特に新党結成について論じてみたい。

⁴⁶ Boehm, Eric. H. (Ed.). (2015). *We survived: The stories of fourteen of the hidden and the hunted of Nazi Germany* (Illustrated ed.; Kindle edition). Pickle Partners Publishing, pp. 169-190; Schad, Martha (2010). *Frauen gegen Hitler: Vergessene Widerstandskämpferinnen im Nationalsozialismus*, München: Herbig. S. 132-160 (田村万里／山本邦子訳『ヒトラーに抗した女たち：その比類なき勇気と良心の記録』行路社、pp. 169-200、2008年)

史料・参考文献

■ 文書館史料

Bundesarchiv, Koblenz (BArchK), N1053 (Nachlass Solf).

■ 文獻

(欧文)

Boehm, Eric. H. (Ed.). (2015). *We survived: The stories of fourteen of the hidden and the hunted of Nazi Germany (Illustrated ed.; Kindle edition)*. Pickle Partners Publishing.

Cortazzi, Hugh (2004). *British Envoys in Japan, 1859-1972*, Kent: Global Oriental

Hempenstall, Peter J / Mochida, Paula T. (2005). *The Lost Man - Wilhelm Solf in German History*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.

Schad, Martha (2010). *Frauen gegen Hitler: Vergessene Widerstandskämpferinnen im Nationalsozialismus*, München: Herbig. (田村万里／山本邦子訳『ヒトラーに抗した女たち：その比類なき勇気と良心の記録』行路社、2008年)。

von Vietsch, Eberhard (1961). *Wilhelm Solf. Botschafter zwischen den Zeiten*, Tübingen: Wunderlich.

(邦文)

アルバム・クローデル編集委員会『詩人大使ポール・クローデルと日本』水声社、2018年
飯田洋介「皇帝と大統領のあいだで—外交官シュテレンブルクとドイツの世界政策」桑名
映子編『文化外交の世界』山川出版社、2023年。

クローデル、ポール／樋口裕一訳『天皇国見聞記』新人物往来社、1989年。

クローデル、ポール／奈良道子訳『孤独な帝国 日本の一九二〇年代』草思社、1999年。

ゾルフ、ヴェー・ハー、長田三郎訳（1926年）『将来の植民政策』有斐閣。

中村綾乃「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層—混合婚をめぐる議論を起点として」工藤章・田嶋信雄編『ドイツと東アジア 一八九〇—一九四五』東京大学出版会、2017年。

中村綾乃「ゾルフと第一次世界大戦—城内平和と懷疑、植民地の回復—」言語文化共同プロジェクト2018『言語文化の比較と交流』(6)、2019年。

中村綾乃「ドイツ革命とゾルフ—帝国の終焉から新生共和国へ—」言語文化共同研究プロジェクト2020『言語文化の比較と交流』(8)、2021年。

中村綾乃「駐日大使ゾルフ—上下逆さまのオペラグラスで舞台を観る」言語文化共同プロジェクト2023『言語文化の比較と交流』(11)、2024年。

長與進『チェコスロvakia軍団と日本 1918-1920』教育評論社、pp. 154-156、2022年。

日独交流史編集委員会編『日独交流 150年の軌跡』雄松堂書店、
2013年。

ラムステット、グスタフ・ヨン著／坂井玲子訳『フィンランド初代公使滞日見聞録』日本
フィンランド協会、1987年。

■ 新聞記事データベース

The Japan Times Archives

朝日新聞記事クロスサーチ

読売新聞 ヨミダス

執筆者紹介（掲載順）

佐高春音 (SATAKA, Harune)

人文学研究科言語文化学専攻 表象文化論講座 講師

中直一 (NAKA, Naoichi)

名誉教授

中村綾乃 (NAKAMURA, Ayano)

人文学研究科言語文化学専攻 超領域文化論講座 准教授

(2025 年 4 月現在)

言語文化共同研究プロジェクト 2024

言語文化の比較と交流 12

2025 年 5 月 31 日 発行

編集発行者

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻